
魔法世界と高校生

藤枝夏彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界と高校生

【Zコード】

N4099N

【作者名】

藤枝夏彦

【あらすじ】

人には言えない過去を持つ志木野春樹が日本にある、魔法高校に通う。その理由は普通の日常へと帰る為に葛藤する物語

最初に

「魔法」

魔法とは呪文を唱えてたりして行うが、この世界では違う。
魔法を使用するには魔法結晶石まほうけつじょうせきが必要となる。

魔法結晶石とは魔力が込められた結晶石である。

人間は誰でも魔力を所持している。だが魔力を所持しているだけでは魔法は使用は出来ないのである。

魔法を使用するにはおのれ自身の魔力を魔法結晶石で変換する必要があるのであるのだ。

けれど魔法結晶石も無限で使える訳でも無い。例えるなら拳銃とかと同じで残弾数が無くなると使用出来なくなるのである。
使用出来なくなつた「魔法結晶石まほうけつじょうせき」は専門のショップに持つていき補充する必要がある。

補充するにはショップへ行き己自身の魔力を魔法結晶石まほうけつじょうせきに変換すれば再び使用する事が出来る。

魔法結晶石を使用した魔法にも種類があり主に火水風雷土光の6種類と補助魔法に分けられる。

基本攻撃系魔法は6種類の中の1種類しか使えないが補助魔法は別で誰でも気軽に使用する事ができる。

今、この世界には4つの魔法高校が存在する。

ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、日本の4校である。

このいずれかの高校を卒業すると国家公務員クラスの待遇を受ける事が出来るので毎年何万人もの受験生がいるのである。

これがこの世界における魔法である。

「4月15日」

日本魔法騎士学校これが今日から俺が通う魔法高校。 といつても1週間前が入学式なのであるが手続きの問題上入学式には出れず、 今日が初登校になる。

なのだが完全に寝坊してしまい急いで学校に向かっている途中である。

「これは完全に遅刻マースだな」

「俺ちゃんと目覚ましかけたはずなんだが・・・」

髪の色は漆黒の黒、髪の長さはやや長めで耳にかかる位、制服を少し着崩して着ている

「志木野春樹」

は通学路を走りながら自分の制服のポケットに入っていた携帯を確認すると

「電源入ってねえじゃねーかよ！」

と一人で叫び

「参ったな、入学式に出れなかつたし、今日が初登校になるのに初日から遅刻か」

つと春樹は最初こそは急いで走っていたが走るにつれ確実にペースが落ちていた。

「はあ、はあ、はあー」

春樹は息を切らしながら

「あーだめだキツイ諦めるか。」

つと完全に走ることを諦め歩き出し

(少し体力落ちたか・・・完全運動不足だな。ここは学校受かる為に勉強ばつかしてたからな。)

とか

(この学校ビンだけ広いんだよ)

つと思いながら春樹は学校への道を歩いていた。

ちなみにこの学校の広さは半径10キロにも及ぶ広大な学校である。

この敷地内に学生寮

があるので校舎は中央にあり学生寮は東の端にある。一応自転車通学も可能であるが

春樹は持っていないので徒歩になる。

(8時15分か 確かHRは8時半だったか。まだここからだと20分位掛かるか)

と思いながら通学路を歩いていると、自分と同じように歩いている女生徒がいた。

(俺と一緒に遅刻組みか)

つとか心の中で思いながら歩いていると前を歩いていた女生徒がいきなり立ち止まりすぐ傍にあつた桜を眺めだした。

「…………綺麗」

つとその生徒は小さく呟いた。後ろを歩いていた春樹は「綺麗つてもう桜の花も大分散つてる」

つと春樹はその女生徒に話しかけていた。

「えっ?」

と言ひ少し驚いた女生徒は「ちらを振り返った。その女生徒は長い黒髪に一重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言ひ言葉が凄く似合つ少女であった。

「あ、いや悪い」

つと春樹は

(なんで俺今話しかけたんだ。)

「うんうんいいの確かに桜もかなり散っちゃてるし・・・」

「でも私つて桜観たのって初めてなの。」

つと女生徒は少し寂しそうな顔で答えた。

「いいの？このままじゃと授業に間に合わないよ」と女生徒が春樹に話しかけてきた。

「おつとねうだそうだ」

さすがにこれ以上遅刻はヤバイと思つた春樹は

「じゃあ俺は先に行く。」

「君はいいのか？」

春樹はそう女生徒に尋ねると

「うん。私はもうちょっと桜を観てから行くから。」

「わかった。じゃ悪いが先に行かしてもらひつ。」

といい別れ際に

「俺は志木野春樹だ。」

つと女生徒に言つと

「うん。よろしく私は冬野雪音」

つと彼女が答えてくれたので春樹は手を上げ別れた。

8時45分

春樹はどうにか学校にたどり着き下駄箱で上靴に履き替えて春樹は廊下を歩いていた。まだ廊下

には生徒が何人かいでおそらくHRが終わつたばかりなのである。その中で春樹は

（えへつと職員室だよなつてえ職員室で何処だよ。くそお学校の中も広すぎだ。）

つと思い広い校内を歩いていると

「おおいいー！」

と後ろから怒号をいわれ振り返ると

「おい！お前1年だろ！なんでこいつの校舎歩いていやがるー。」

と金髪ピアスの男がひたひたに歩み寄ってきた。近くにいた女生徒達は口々に

「やばいよ。あの子

や
「1年生だからここのルール知らないのかな？」

「私、先生呼んでくる。」

などと、周りにいた女生徒達はちょとしたパニックになっていた。

春樹は

（初日から最悪だなまさか絡まれるとほ・・・俺的には田立ったくないんだが・・・）

つとか考えてくるとその金髪ピアスの男子生徒が春樹の前まで来て

「おい！聞いてんのか！」

つと怒号を飛ばしてくる。春樹はこれ以上絡まれても面倒なので

「はい、聞いています」

つと答え

「すいません。今日から初登校なんで職員室を探していたら間違えてこっちの校舎に入つてしまつたんです。」

春樹が素直に謝ると金髪の男子生徒は

「ひつ

と舌打ちをして

「職員室は向こうの校舎だ。さつもと行け」と金髪男子生徒に言われた春樹は「ペツコ」と一度頭を下げその場を後にした。

登校（後書き）

初小説になります。

初登校そして出会い②

春樹は金髪ピアス男子生徒にいわれた校舎に行くとすぐに職員室が見つかり、春樹は

「あっこいか

「コンコン」

と2回職員室の扉をノックし

「失礼します」

つといい春樹は職員室の中に入つていった。

職員室の中はまるで図書館のよつで魔道書や参考書などが積み上げられ本當

に職員室か?と思つ程である。春樹はすぐ傍にいたの男性教諭に
「あの~すみません」

つと声をかけ

「今日からこここの学校でお世話になります。志木野春樹です。」

つと男性教諭に挨拶すると

「ああ1年生の子があちよつと待つて」

角刈りでいかにも体育教師丸出しな男性教諭が大きな声で

「一條先生、一條先生、先生の所の生徒がやつと着ましたよ」と呼ぶと奥の本の山の方から

「は~い今行きます。」

つと奥の本の山から淡い栗色の茶色の髪で腰くらいまでの長さの髪でかなり童顔身長も春樹よりかなり低くまるで同じ年の同級生みたいな女性出てきて

「あ~君が志木野春樹君ね。よつこそ魔法騎士高校へ。あたしは君の担任の一^{じょう}条未來よろしくね。科目は魔法学ね

つてか来るの遅いよ志木野君もウエア終わっちゃってるからね。」「

つ少し怒り気味で春樹に近づき

「志木野君次遅刻したらぶん殴るよ」

満面の笑みで拳を握り怖い事を言つてきた。

(教師が生徒をぶん殴るつて。いいのかよ・・・)

春樹が苦笑しながらそんな事を考えていると

「じゃあ1限目あたしの授業だからその時にクラスの皆さんに紹介するね あつ志木野君の

クラスは1 - 4だから」

「あつ、ちなみにランクはFね。」

と担任の一一条が笑いながら言つてきたので

春樹はコクンと頷き

「はい、わかりました。」

と答えた。

「じゃあちよっとあたし授業の準備してるからそこまでりよつと待つててね。」「

といいまた担任の一一条は本の山へ消えていった。

(Fランクねえ・・・まあ俺の今の状態だつたらFランクがいい所

だよな・・・

まあその方がいいか目立たなくて・・・色々と・・・)

春樹は「くすつと」誰にも気づかれないくらいの笑みを浮かべた。

その場で待たされ待つ事5分程で担任の一一条未来が片手に教科書も持つて現れ

「いやあお待たせお待たせじやあ志木野君教室行こつか

つと一一条がいい

「あつ、はい」

と春樹は答えた。

教室に向かう途中で春樹は一条に

「そういえば先生は魔法ランクはいくつなんですか？」

そう聞く右手を腰にあて一条は笑いながら

「あつは あたしのランクはBランクだよ」

つと胸を張つていつてきた

「魔法ランク」

とはSランクからFランクの7段階で決められ、この世界でもSランクの魔道師は20人しかいないこの20人は「だいまどう大魔道師」と呼ばれている。主にこの世界を動かしている人間がこの20人である。

「Aランク魔道師」

このAランク魔道師でも300人程しかいない。その殆どがまほづ魔法騎士まほづきしである。

「魔法騎士」

とは魔法が使える警察みたいな者である。ちなみにこの「魔法騎士」に席を置くにはかなりの至難であり超エリートでも必ず入れるものではない。

「Bランク」

だからこのBランクでも世間一般ではエリートなのである。Fランクとはその中でも一番下なので使える魔法の種類も一般人のそれとほぼ変わらない

位である。この学校では最低でも卒業までにはCランク魔道師になれる様に教育が行われる。

「あ、志木野君教室ここだよ。」

どうやらここが教室らしい。廊下の一番端の教室に1・4と書かれ

たプレート
そして、

「春樹の運命を大きくかえる事になる者達に出会いつ。」

初登校そして出会い～（後書き）

今回は少し短いです・・・

初登校そして出会い③

「先生、あの子が入試の時の模擬戦闘でアレックス先生を倒した子ですか？」

中年で眼鏡を掛けた教師が職員室でマイカップでコーヒーを飲みながら角刈り体育教師にそう尋ねた。

ちなみにこのアレックスと言う教師だが学生時代ボクシングの選手だったらしい。

「ええ、そうらしいですね。私はその場に居なかつたんですが、教官をしていた二条先生が

言つてたんだですが、凄かつたらしいですよ。」

角刈り体育教師が一カ一と笑いながら答え

「あのアレックス先生を一発で倒したんですよ。私も一度戦つてみたいですよ。」

と角刈り体育教師が言つと

「いや、いや先生が戦つちゃ駄目でしょ けが人がでちゃいますよ」と、中年眼鏡教師は笑いながら答える

「まあ、そうですよね あつはは」

角刈り教師と中年眼鏡教師の笑い声が職員室に響いた。

「おーい、じゃあみんな一席に着いて授業始めるよー」
担任の一條未来は手に持つていた教科書を手でポンポン叩きながら
教室のちょうど

真ん中にある教壇の前に立つとそれまで自分の席から離れていた生徒達が

「はーい」

といいながらそれぞの席に戻つて行き全員自分の席に着くと担任の一一条未来が

「授業始める前に皆にお知らせあるよー」

一一条未来が笑顔で生徒達に言つと一番後ろの席座る短髪の生徒藤峰蓮司ふじみ
ねれんじが

「IJの授業前の発表ゆうたら・・・まさか未来ちゃん転校生かー？」

関西弁で短髪の藤峰蓮司が生徒が立ち上がり嬉しそうに聞くと

担任の一一条未来は胸の前で腕をクロスにさせて

「はーい残念。 転校生じゃ無いよ。」

と答えると、関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司が少し残念そうに

「なんや～ちやうんかいな～ ジャあ未来ちゃんお知らせつていつたいなんなん？」

はつ まさか抜き打ちテストや無いやろうな？

そんなんホンマにアカンでテストなんかされたら俺絶対赤点やわ～」

「関西弁短髪男子生徒は少し青ざめた顔で担任一一条未来に聞いてみると
「蓮司うるさいよ。 全く話が前に進まないじゃん。」

担任一一条未来は呆れた顔で関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司に指摘する。

「ゴメン、ゴメン。 で、未来ちゃんお知らせつていつたいなんなん？」

関西弁短髪男子生徒不思議そうな顔で一一条未来に聞いてみる。

「えーと入学式の時からずーと空いていた席があるでしょ。 ちょ

うど連司の前の

席今日からその席の子が来るから。」

一一条未来は少し疲れた顔でクラス全員に伝える。 するとまた関西

弁短髪男子生徒

藤峰蓮司は騒ぎだし

「ホンマかー！ ズーッと前の席空いとつたからめづらゆ氣になつ

とてん。

え？まさか女の子かいな

などと騒いでいると藤峰蓮司の生徒の隣の席の女生徒が立ち上がり

「ちょっと！ 蓮司少し黙つて！ 話が前に進まないじゃない。

隣の席に座る女生徒ポニー・テールで髪の色は少し淡い茶色長谷川美羽は

隣の席に座る藤崎蓮司に指摘し

「お～恐まじ美羽は俺の所のオカソンより恐いで」

などと言うと他の生徒達がクスクスと笑いそんな事を言われた本人は顔を真っ赤に染め

「蓮司！ アンタあとで覚えておきなさいよ！！」

と言い頬を膨らまし長谷川美羽は席に着きそれを観ていた一条未来は笑いながら

「うん やっぱりいつ観てもあんた達二人の夫婦漫才は面白いよね。などと言つとクラスでどつと笑いがおきそんな事を言われた一人はかなり恥ずかしそうにし

「先生！ 何で私がこんな奴と夫婦なんですか！」

長谷川美羽顔を真っ赤にし立ち上がり大声で言い

「そや、そや俺ももつとおしとやかな子がタイプや」

藤峰蓮司も立ち上がり反論する。

「ゴメン、ゴメン謝るから席に着いて。」

そう一條未来が言うと藤峰蓮司と長谷川美羽はしぶしぶ席に着いた。

「じゃあ、話がかなりそれちゃつたけど話戻すね。」

一條未来がそう言うと廊下で待っている春樹に

「じゃあ志木野君入ってきて。」

そう一條未来に言われると廊下でかなりの時間を待たされた春樹は（やつとかよ。あまりにも話が進まないから忘れられてるのかと思つた。）

そんなことを考えながら春樹は教室のちょうど真ん中にある教壇の

傍に行き

担任の一一条未来の横に立つ。

「じゃあ志木野君、自己紹介よろしく。」

担任の一一条未来そう言いながら黒板に春樹の名前を書き少し横にずれ春樹は

教壇の前に立ち

「えーと志木野春樹です。入学の手続きでちょっと

登校するのが遅くなりましたが。今日からよろしくお願ひします。

春樹は「ペツ」^{しきのはるか}と頭を少し下げ自分の紹介を行つた。

「志木野君は海外暮らしが長くて日本に帰つてくるのも十年振りらしいから

みんな仲良くしてあげてね。」

担任の一一条未来があまりにも少ない春樹の血口紹介に付けたしそう

言い

「じゃあ志木野君の席は真ん中の一番後ろの席の前の席ね。」

担任の一一条未来にそう言われ春樹は指示さらた席に着き持つていた

かばん

を机の横に掛けた。席に着くとすぐに後ろに座る生徒から

「今日からよろしくな。俺は藤峰蓮司^{ふじみねれんじ}や普通に

蓮司で呼んでくれ。俺もお前の事春樹^{れんじ}で呼ぶさかい。」

と言われた春樹は

「わかったよろしく蓮司。」

春樹はふつと自分の横の席を見ると空席だったので

「一つ聞いていいかな」

と後ろの席に座る蓮司に聞くと

「ええで。どないしたん?」

と蓮司が答えたので

「俺の隣の席の子は今日は休みなのか?」

春樹がそう蓮司に質問してみると

「いやー悪い俺ちょっと分からへんわ」

蓮司は少し気まずそうに答えたので春樹が不思議そうにしていると

蓮司の隣の席に座るポーテールの少女が

「私は長谷川美羽。 気軽に美羽て呼んでね。

春樹君つて海外から来たんだよね 何処の国からきたの?」

自己紹介をした長谷川美羽は目をキラキラさせ帰国少女春樹に質問してきた

(うーん・・・どうやって答えようかな)

と考えていると

「こらーそこお」

担任の一一条未来が人差し指をビッシと春樹達の方へ向け

「その聞きたい気持ちも分かるけど、もう授業始めるからそういう質問タイムは授業終わってからにしてね。」

担任の一一条未来がそう長谷川美羽に言つと少し残念そうに机に置いてある

魔法学の教科書に視線を戻す。それを確認した一一条未来は自分の手元にある魔法学の教科書

を開き

「じゃあ昨日の続きの16ページからやるね」

と担任の一一条未来が言うとクラス中の生徒達も言われたページを開き教科書に目を通していき

春樹も言われたページを開き目を通していくが

(結構難しいな、俺こういう理論の話はよく分からないな)

など考えていると突然教室の前の扉が開き担任の一一条未来が

「もう授業始まってるよ。早く席に着いて」

と言つと遅刻してきた生徒は

「1めんなさい。」

と言い自分の席に向かう。春樹は目を通していた教科書から横目で

隣の席を見ると

(他の席は全部埋まっていたから・・・あー隣の席の奴か)

と考え一いちに向かって来る生徒の方を見ると生徒は長い黒髪に

重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言つ言葉が凄く似合つ少女

「冬野雪音だつた」

春樹の横の席の生徒は今朝登校中に出会った冬野雪音ふゆのゆきねだった。

春樹は自分の席の隣の席に座つた冬野雪音に小さな声で

「今朝はどうも。一緒にクラスだつたんだな。」

と言つと自分の席に座り魔法学の教科書を読みながら小さく頷いた。春樹はこれ以上喋つてまた担任の一条未来にこれ以上怒られるのも嫌だったので自分の魔法学の教科書を読みながら

（彼女が入ってきた瞬間クラスの空気がちょっと変わったな）

春樹が教室を見渡すと少し気まずそうにしているが全員担任の一条未来の話を

聞きながら教科書を見ている者やノートに今聞いた話を書いている者春樹後ろの席

に座る藤峰蓮司ふじみねんじ、長谷川美羽はせがわみうの二人

も担任の一条未来が話す内容に耳を傾けながら教科書にも目を落とす。

春樹の自分の教科書に目を通すが春樹はこういう理論の話は得意では無かつたので

若干ウトウトとしながら

（あ～こういう理論の話は俺じゃなくて秋人あきひとの得意分野だからな～）とか考えていると眠気の誘惑には勝てず春樹の意識が教科書から離れ意識が飛んだ。

「おい、被験体24号」

暗い通路を歩いていると後ろからそう声を掛けられ

「…………お前、俺をその番号で呼ぶな。俺には春

樹って言つ名前がある。」

春樹が立ち止まり振り向かず声を掛けてきた男に言い返すと

「あ～わりいわりい被験体24号のは・る・き君」

その白衣を着た男はニヤニヤ笑いながら春樹を馬鹿にしながら言つてくる。

春樹は目力だけで人を殺せるような目でその男を睨みつけ

「…………お前…………口の利き方には注意しろよ…………それ以上言つて

俺も、あいつ等も黙っちゃいない。」

春樹が男にそう言つと春樹の事を馬鹿にしていた男が一歩後ろに下がり

「おお～こええ、こええ、そんな怒んなよただの[冗談だよ。」

春樹が無視して行こうと思つた瞬間に男が

「お前をここから出て行くらしいな。良かつたな外の世界だぜ。」

男がニヤニヤして言つと春樹は

「…………どの道またここに帰つて来るんだ全然良くは無い。」

春樹がそう答えると

「まあ、そりやそつかお前さんの帰れる場所はここしか無いからな。」

男が笑いながらそう言つと

「聞く話によるとかなり難しい任務らしいじゃねーか まあ死なない程度に頑張りな。」

男が笑いながら暗い通路の奥へと消えていった。

「…………当たり前だ。こんな事で死んでたまるか……俺達は生きて

このクソみたいな所から出て行く。そのためにも俺はあいつを……

…………

「

「——志木野春樹——」

春樹はふっと田を覚まし声の発信源の方を見ると笑顔で俺の方を見ている担任の一一条未来が居た。

「君ねー私の授業で居眠りするとは度胸あるね。」

担任の一一条未来がこれでもかという笑顔で春樹の席の方へと歩いてくる。

だがその瞬間に一時間田の終了の合図のチャイムが鳴り響き担任一一条未来は

少し残念そうに

「春樹、次居眠りしたら教育指導だからね」

担任の一一条未来はその一言を残して職員室へと帰つていった。

(教育指導てただの暴力だろ てか志木野君からいつのまにか呼び捨てになつてるし。)

春樹は深いため息をつくと後ろの席の蓮司が笑いを堪えるように

「春樹お前エライ怒られたな。」

蓮司は笑いを堪えられなかつたようでグラグラと笑つてゐる。

「俺初めて見たで未来ちゃんの授業で寝てるやつ ほんま度胸やで。」

蓮司がそう言ひととなりの席の長谷川美羽も

「ほんとだよ。 春樹君一一条先生ああ見えても凄く怖いんだよ。」

他のクラスの子が言つてたんだけど校内で禁止されてる魔法使つての喧嘩をしたらしいんだけどそれを見つけた一一条先生が鬼の形相で走つていつて

魔法使わず体術だけで喧嘩してた2人を止めたつて噂もあるから春

樹君も気よつけた

方がいいよ。」

そう長谷川美羽が言うと春樹は

「そりや怖いな これからは気よつけるよ。」

そんな会話を三人で行つていると春樹の席の前にクラスの生徒達が集まつてきて

各自の自己紹介をしだした。

「私夕美宜しく 夕美ちゃんて呼んでね

とか

「志木野君って外国から来たんだよね何処の国から来たの?」

とか

「志木野君って彼女とか居るの?」

とかそれに春樹に言つてくる

「ちょっと待つてそんなに一斉に言われても答えられないから

春樹は少し困った顔をしているといいタイミングで次の授業のチャイムが

なり響いて春樹の席の前にいた生徒も少し残念そうにそれぞれの席へと戻つて

行き春樹は心の中で一つため息をつきふつと隣の席を見ると一時限

目の授業が

終わつていつのまにか居なくなつていた冬野雪音もいつのまにか帰つてきていた。

この学校では通常の授業も行われる。 その内容は普通の高校生が習うのと同じだか

この学校は一応超が付くほど優秀校だから内容もかなり難しくいうにうつ勉強があまり

得意ではない春樹は一時限から四時限の通常授業に頭を悩ました。

ようやく四時限の終了のチャイムがなり春樹は自分の髪の毛をく

しゃくしゃとし

(まさか授業がこんなにも難しいなんて テストの時どうじょうか
な・・・)

とか考へていると後ろの席に座る蓮司が

「春樹、昼飯どうするんや?」

と春樹に尋ねると

「いやまだ何も考へていないな。」

そう言つと蓮司が

「じゃ一緒に食堂へ飯いこか。」

春樹は少し考え

「そうだな。」

と言い席から立ち上がり教室から出た。

食堂までは教室からすぐにつき扉を開けると結構混んでいて

「結構混んでんな~ どうか席空いてへんかな

と一人で食堂内を歩いていると

「蓮司」

と声を掛けられ一人で振り返るとそこには金髪の生徒が手を上げて
いる

「おお口イやんか ちょっと何処も席空いてへんから席合に席でも
かまわへんか?」

と尋ねると

「ああいいよ。」

と言つと机の上に置いてあつた荷物を片付けその間に春樹と蓮司は
食事を買いに行き
金髪生徒の所に戻つてくると机は片付けられていたが春樹達を待つ
ている人数が増えていた

春樹が机に着くと

「ゴメンね春樹君何処も席空いてなかつたから合に席をせんりうつ
ね。」

長谷川美羽はそう言つと胸の前で手を合わせて言つてきたので

「全然大丈夫だよ長谷川 僕達も合い席させてもらつてるから」

春樹がそう言うと長谷川美羽が少し膨れ面で

「美羽」

と一言いい

「朝言つたでしょ 美羽て呼んでつて」

そう春樹に言うと

「あ～ゴメンえーと み、美羽」

春樹が少し恥ずかしそうに言うと美羽は嬉しそうに

「うん よろしい」

そんなやり取りをしていると春樹の前に座る金髪生徒が

「俺は岡崎口イ。 春樹宜しく。」

春樹は一つ疑問に思つたので

「日本人じやないのか？」

と、尋ねてみると笑いながら

「ああ俺アメリカ人とのクオータなんだ。 まあ顔は殆ど日本人で
髪の色だけ受けついたんだ」

春樹は納得した顔で

「なるほど分かつた ジャあこれからよろしくなロイ」

とロイの前に右手を差し出した。それを見ていた蓮司が

「良かつたな春樹これで友達三人目やで ジャあそろそろ飯でも食

べようや」

蓮司が今日の昼御飯のカツ丼を食べようとお箸を持つた瞬間

「ちよつと！ お待ちなさい！」

同じ席に座っていた少女が突然立ちあがつた少女はとても綺麗な金色で
髪で

縦ロール白人特有の綺麗なブルーの瞳少女

「わたくしまだ自己紹介が終わつていませんわ」

と、お昼のカツ丼を食べようとしていた蓮司にびしつと一指し指を
向け

「わたくしの自己紹介が終わるまで食事はお待ちなさい」

と、言い蓮司は不思議そうに

「なんやレイラお前まだ自己紹介してへんかつたんか。えーと春樹
こいつはレイラや 良し自己紹介も終わつたし飯にしよか。」

蓮司は再び自分の丼に手をかけ食べようとしたので
「なんでそんな適当な自己紹介なんですか！」

と小女が怒りながら蓮司言うと

「いやあでもはよ食べな御飯固なつてまつで。」

と蓮司が言うので小女は

「はーもういいですわ 先に食べてくださいな。」

と蓮司に言つと

「じゃ先に食べさせて貰うわ。

と自分の丼に入っているカツ丼を食べだした。

春樹、美羽、ロイは完全に食べるタイミングを無くし小女が
自己紹介を始めるの待つていると蓮司の方を見ていた小女が
こちらに振り返り右手を腰に当て

「わたくしレイラ・ハーゲンボルトですわ。 イギリスの貴族
ハーゲンボルト家の次期当主ですわ。」

と、自身たっぷりに自己紹介を行つてきた。すると横で一人

お昼を食べていた蓮司が食べるのを止め

「なあレイラお前がようゆうとるハーゲンボルト家つて言つのは
一体なんなんや？」

と言うと春樹、美羽、ロイの三人は呆れて

「あんた、本当に知らないの？」

と美羽が呆れて聞き

「蓮司僕でもハーゲンボルト家は知つてるよ」

とロイも呆れ

「そんなん言われても知らんもんは知らんからな。
つてるんか？」

と春樹に尋ねると

「当たり前だ。 勉強が出来ない俺でもそれくらいは知つてゐる。」

春樹も呆れて言うと

「まじか皆知つとるんか・・・」

と、少し寂しそうに答え

「それでハーゲンボルト家つていうんは何や?」

と、蓮司が言つとレイラは少し嬉しそうにし説明しようとした瞬間

春樹が

「ハーゲンボルト家つて言つのはイギリスの五大貴族の一家だよ。」

春樹が答えると前に座つていたレイラが

「なぜあなが説明するんですか。」

と、ちょっと怒りながら言つているが春樹はさうと流し話えて続ける。

「イギリスの女王エリザベスを守る五枚の盾、ハーゲンボルト家はその中

の一家だよ。」

と、説明するとレイラも納得したかのよつと首を傾いでいる。

「と、言つてはレイラお前貴族やつたんか!」

蓮司はカツ丼を食べる事も忘れてびっくりしているようだ。

「そうですね。 わたくしは絶対にこの学校を卒業して女王陛下を守れる

様な強い騎士になります。 それがわたくしの夢ですわ。」

と、レイラは満面の笑みを浮かべ春樹達に語つた。

「じゃあ俺も自己紹介しどくか 僕の名前は志木野春樹だレイラよろしくな。」

春樹が笑顔でレイラに言つとレイラは少し恥ずかしそうにじ

「こちらこそよろしくお願ひしますわ。」

それを見ていた美羽が

「良かつたねレイラ春樹君と友達になれて。」

と、言い

「レイラ休み時間とかもずっと春樹君の喋りたそつたもんね。」

と、言うとレイラは顔を真っ赤にして
「み、み、美羽なんて事をいつてますの そ、そ、そんなわけあり
ませんわ。」

と、言うと美羽はくくと笑い

「あれー そうだつたけ」

と一人でやりといをしているの横目に春樹とロイは完全に伸びたラーメンを

食べる。すると子鈴のチャイムが食堂に鳴り響き他の生徒達も教室へと戻つて

行くので春樹達も教室に戻るため自分達が座っていた机の上を片付け教室に

戻ろうと思つたとき春樹がふつと思い出しき

「そういうえば日本にも魔術師の有名な一族があつたよな。」

と、言うと

「いや俺は知らんわ。 じゃあ急ぐから先行くわ」

と蓮司、美羽、ロイは先に教室に戻つていった。残された春樹とレイラは

不思議そつに顔を合わせ少し考えたあとで教室に戻つて行つた。

初登校そして出会い④（後書き）

今回は少し長めになります

昼食が終わり午後最初の授業は魔法の歴史の授業で春樹はこの手の授業も得意では無いので全く授業に関係無いページをペラペラとめくつたりしていると、昼食後と言つこともあります急激な眠気に襲われふと気がつくと授業も終わり次の授業の為の準備を行つていた。

(うん？ なんだ移動授業か)

と、覚醒したばかりの頭で考えていると春樹の後ろの席に座る蓮司れんじが春樹の右肩をポンと叩きながら

「春樹お前授業中ずっと寝とつたな」
後ろの席に座る蓮司が二口二口した顔でそう言つてきたので
「ああ 僕昔からこいつの頭の使つ授業は得意じゃないんだ」
春樹は寝起きの顔で頭を搔きながらそう言つと
「まあ別に俺はええねけどあんま授業させましたら指導受けける破目になるや」

連司がそう言つと蓮司の隣の席に座るポーテールの少女長谷川美羽も

「そりだよ、春樹君」の学校そつこつの結構厳しいから度が過ぎると通学もあるから気よつけてね。」「

と美羽が少し心配そうな顔で言つてきたので

「ああ これからわ気よつけるよ。みみ」

春樹はそう笑顔で言つと美羽は顔を少し赤くして向きながら

「まあわかつてゐなら いいんだけど。」

そう言うと美羽はそそくさと教室から出て行ってしまった。

春樹と蓮司は

「なんや あいつ」

「さあな

と二人で言つてると蓮司が何かを思い出したよう

「そや次の授業移動授業やねん」

そう言うと蓮司が移動授業の準備をしだし

「春樹はよう準備せえよ」

連司あ荷物を持ち教室から出ようとしたりので

「待て、連司次の授業てなんだよ?」

そう言うと教室から出ようとしたりて振り返り

「何をゆうとんねん 朝のH.Rの時未来ちゃんゆうとったやん

連司がそう言つて春樹は少し考え

「何が?」

と、春樹が不思議そうに言つと蓮司が呆れた顔で

「次の授業は魔力検査と身体能力検査やぞ」

と、連司が言うと

「・・・あゝ 魔力検査ね」

「魔力検査」

と、は入学して一番最初に受けるテストであり、主に潜在魔力検査、属性魔力検査、身体能力検査の三つに分けられる。

「潜在魔力検査」

とは自身の中にどれだけの魔力があるのかを検査する物でこちらの検査結果は生徒に

は説明される事はない。

「属性魔力検査」

基本使用できる属性は一つでありこの検査で得られた情報で自分の属性を鍛えていくことになる。

「身体能力検査」

現代の魔法は魔力結晶石を使い魔術を使うので弾切れの状態になる事もあるのでいざ戦闘の時近魔術を使わない近接戦闘も行える様に主に体力検査などが行われる。

主にこの三つの検査に分けられこのテストであまりにも低い数値を出してしまつと退学になる事もある。

「春樹そんなんぼーっとして授業遅刻してもうたら未来ちゃんに雷落とされまう急ぐぞ」

と、言うと蓮司は教室から出て行ってしまったので

「はあ～魔力検査とかイヤだな」

と、ぶつぶついいながらも春樹を教室から出て蓮司の後を追いかけた。

「おい蓮司待てって 僕何処でテストするとかしらないんだから。」

春樹が走りながら蓮司の後ろからそう言うと蓮司は走りながら

「えーとつなテスト受ける場所は入試試験の時に模擬戦闘のテスト受けた場所や」

と、蓮司が言うと春樹は同じく走りながら考え

「ああ～あそこか」

と、言うと春樹は突然蓮司とは別の道へ行き

「おい、おい春樹お前どこへ行くんや」

と、蓮司は叫んでいるが春樹は無視し

「階段から言つた所で絶対に間に合わない。 だったらショートカットだ。」

春樹はそのまま走り渡り廊下に着くと他の生徒もいたがそれも無視しそのまま

の勢いで一階から飛び降りまるで何事も無かつたかの様にそのまま走り抜ける

それを観ていた生徒達は

「へ？ 今になに？」

女生徒が隣にいた女生徒に聞くと

「・・・イヤわかんない。」

二人の女生徒達は唖然としている。 まあその通りである。 いきなり男子生徒が走つて

きてそのまま一階から飛び降りたのだからそれはビックリするだろう
春樹はそのままの勢いで走りすれ違う生徒達には驚きの顔で見られるがその視線を無視

し春樹はギリギリで検査が行なわれる部屋にたどり着いた。
春樹がゼエゼエと肩で息をしていると春樹に気が付いたロイが近づいてきて

息が上がっている春樹を見て不思議そうに

「春樹なんでそんなに検査の前からばててるの？」

そんな事を聞いてきた春樹は心の中で

(ここにつこんなにバテバテになったのはお前らのせいだろ)

と、ロイに言つてやるうかなと思つたがそこはグッと我慢してその言葉を飲み込み

「いや間に合ひそうになかったからちょっと走ってきた」と、言うと明らかにばてている春樹の姿をもう一度見て

「そつかそつか春樹は面白いな」

と、ロイが笑いながら言つてきた。 春樹は心の中で

(全く笑い事じゃないんだがな)「

と、思つてみるとロイが

「そういえば春樹、蓮司はどうしたの？」

と、ロイが春樹に聞いてきたので春樹は少し考え

「さあ俺は遅刻しそうになつたから走つてきたからな 蓮司は知らないな」

と、春樹が答えるとロイは

「ふーんそつか蓮司ついていなないな」「一条先生に怒られるよ

と、ロイはそう言つと蓮司が一条に怒られるシーンを想像したのか手を口に

持つていき一人で笑つてゐるおそらくこの会話を聞いていなかつた人間が見ると

かなり怖いだらう金髪の男子生徒が一人で笑つてゐるのだから

「そういえばロイ検査ていうのは制服のままでいいのか？」

と、一人で笑つてゐるロイに聞くと

「え？ ああ身体能力検査の時は着替えるけど魔力検査の時は制服で大丈夫だよ。」

まだ顔は笑つてゐるがそつロイが言つてきた。

春樹は

「ふーん」

と、答え周りをクルツト見回し他の生徒を見ると金髪縦ロールの小女レイラと

目が合い春樹は田をそらすと金髪縦ロールのレイラがこっちに歩いてきて

レイラお得意のいつものポーズ左手を腰に当て人差し指をこちらへビシット

向け

「ちょっと一何で目をそらしますの」

と、春樹の前に立ち少し怒つた顔でそう言つてきた。

「いや、目をそらしたわけじゃない。」

と、春樹が答えるとレイラはまだ不満があるのかまだなにかぶつぶつ言つてくる。

春樹は「はあー」と、ため息を付くと覚悟を決めレイラに一一条が来るまで永遠と

ぶつぶつと言われ続けた。

一一条が部屋に入ってきたて検査の説明をしていると息を切らした蓮司が部屋に入つて

きて一一条に

「蓮司これで遅刻2回目だから今日検査終わったら指導室行きね」と、一一条に言われ蓮司は呆然としていた。

それを見ていた春樹は

「蓮司すまない」

春樹は小さな声で蓮司に謝った。

初登校そして出会い⑤（後書き）

少し更新が遅れました

担任の一一条未来に指導室行きを言い渡され最初こそは呆然としていた蓮司

だつたのだが直ぐに立ち直り今は春樹の横でブツブツと小さな声で文句を言っている。

「春樹お前一人だけ助かりよつて。あんなもん裏切り行為やぞ。蓮司が春樹にそつ言うと春樹は表情を変えず担任の一一条の方を観ながら

「何が裏切りなんだ。」

春樹が一一条の話を聞きながら小さな声でそつ言うと
「何がつて・・・よお言つは自分一人だけ助かつて俺一人だけ指導室行きやで」

自分でそんなことを言つてまた肩を落としている。それをみた春樹は一つため息を付き

「はあー・わかったよ今度何か奢るからそれで許してくれ
春樹が蓮司にそつ言うと今まで肩を落としてた蓮司が一いちらをちらつと見て

「ほんまか?」

と、さつきまで肩を落として呆然としていた蓮司が少し嬉しそうにして言つてくる。

「ああ本当だ。その変わり安いランチだけだからな。」

と、蓮司に言つと

「わかつた。しゃあなしそれで許したるわ。」

春樹は現金な奴だなと思ったが声に出さずまた一つため息をついた。蓮司の文句も一段落し一一条の話を聞こうと思いそちらへ耳を傾けた

がどうやらもう話が

終わりそれを聞いていた生徒達も検査の準備を行っていた。

「じゃあ最初は「せんざいまりょくけんさ潜在魔力検査」からだから皆こっち

に来て。」

担任の一条に言われ全員一条に付いて行くと広い部屋に全員入れられるとそこには

まほうけつしょせき巨大な魔法結晶石があつた。

普通魔道師が持つている魔法結晶石は小石程度の大きさなのだがここにある魔法結晶石

は岩位の大きさであつた。全員が呆気に囚われていると一条が

「じゃあ皆この魔法結晶石に一人ずつ手を触れてといってそれだけで

潜在魔力検査は

終わりだから。」

と、一条が言うと前で聞いていた生徒達から順番に触れていく春樹は一番後ろで聞いていた

ので春樹は一番最後に巨大な魔法結晶石に触れる。 そうすると何かに自分の中を見られる

様な感覚に襲われたがすぐに終わり時間にしたら約10秒位だった。最後の春樹の検査が終わると

二条が

「じゃあ全員魔法結晶石に触れたよね。 じゃあ次は「ぞくせいいまりょくけんさ属性魔力検査」だから付いて来て。」

と、二条は言うと巨大魔法結晶石だけ置いてある部屋を後にする。その部屋から出ると次はすぐ隣にある部屋に連れて行かれ

「じゃあこの部屋では君たちの属性を検査するから。 じゃあ検査の前に

これを皆に渡すね。」

と、二条が全員に言うと先き程から持っていたアタッシュケースを床に置き

なにやらパスワードみたいなのを入力をする。 するとアタッシュ

ケースは

「力チャヤ」といつ音を出し開くするとその中から大量の魔法結晶石が入つて

いる。

「じゃあ皆良く聞いてね今から渡すこの魔法結晶石は在学中に紛失とかしても代わりが無いから絶対に失くさないようにもし失くしたら退学だから。

気おつける事。」

と、一條が説明を終えると生徒一人、一人に魔法結晶石を手渡していく。

それが全員に渡ると一條は

「じゃあ今から属性検査するから皆集合して。」

と、一條が言うとそれまで今渡された魔法結晶石を貰つて喜んでいた他の

生徒達も一條の元に集まつてくる。

「じゃあ検査の前に魔法技師の赤峰あかみね技師を紹介するね

と、言うと一人の女性が部屋に入つてきた。その女性は黒髪ショートに

眼鏡をかけ身長はおそらく170cmはあるだらう年は見た感じ20代

後半くらい一條に比べたらかなり大人ぽい

「えーと今一條先生に紹介された赤峰です。一応この学校専属技師です。皆さんよろしくお願ひします。」

と、深々とお辞儀をしてきた。そのあまりにも深々ちしたお辞儀だったの

何人かの生徒は釣られてお辞儀をしている。

「じゃあ今から属性検査するね。じゃあ赤峰さんここからはお願いします。」

と一條が言うと魔法技師赤峰が全員の前に立ち

「じゃあ皆さんの魔法結晶石に皆さんのが力を魔法結晶石に変換しますので

こちらに一人ずつ並んで下さい。」

と、赤峰が言うと他の生徒達が一列に並んでいく春樹がその列の一番最後に並ぶと

一番前の生徒から属性検査が行われていく。

ちなみにこの「魔法技師」とは現代魔法は魔法結晶石が無いと使えない為自身の

魔力を魔法結晶石に変換する必要がある。だがこの変換作業は個人が簡単に使う

事は出来ず専用に魔法技師の元に持つて行く必要がある。

魔法結晶石の変換を待っていると最初に変換作業終えた長谷川美羽はせがわみゆが俺の前に

来て

「あ、春樹君聞いて聞いて私の属性風だつたんだ。」

美羽が嬉しそうにそう春樹に言つてくる。ちなみに風属性と言つのは全然

珍しく無い。春樹が「おお良かつたな」と、答えると「いいでしょ。羨ましい

でしょ」と、満面の笑みで言つてくるが適当に「ああ」と、言つておいた。

美羽の自慢話が終え順番を待っていたら次はロイが春樹の前に来て
「あ、いい所にいた春樹聞いてくれ俺の属性火やつてんええやろ」と、ロイが美羽の同じテンションで言つてきた春樹は美羽の時みたいに

適当に答えた。

また、順番を待っていた春樹の前に次は蓮司が現れ

「お、春樹やないか、聞いてくれ俺の属性火やつてんええやろ。」
蓮司が自慢げに言つてきたがまた同じく適当に答えた。

次は金髪ロールのレイラが現れ左手を腰に当て右の人差し指をこち

らに

向け

「あ、春樹さん聞いてトセー。わたくしの属性雷ですわ。このわた
くし

に一番合ひ属性ですわ。」

レイラがブルーの瞳をキラキラさせ春樹に自慢していく。春樹は適
当に

答えたがどうやらそれがばれたらしく

「なんですのその適当な返事は」

レイラがぶつぶつと文句を言つて来た。その時前でなにやら歓声が
上がつた

春樹が何だと思って前を見るとそこには冬野雪音ふゆのゆきねが居た。
何があつたのかと前に並んでいたクラスメイトに聞くと
「え、なんか冬野さんが属性変換したらしいんだけどなんか見た事
の無い

属性だったの。」

と、前に居た女生徒が答えた。

「それはいつたいどんな属性だつたんだ。」

と、春樹が女生徒に尋ねると

「えーと氷の属性だつたらしくよ」

と、答えたその答えに春樹は

(氷だと・・・と言つ事は日本が誇る四季の一族か・・・それだつ
たら

納得がいくな。)

「四季の一族」

とは日本の最古の魔術師の一族である。その使用する魔術は一族の
みに伝わる

魔術であり他の者は一切使用する事は出来ない。

春樹が難しい顔で考え方をしていると

「志木野君 志木野君」

と、呼ばれ

「あ、はい」

と答えると春樹の前にはもう誰もいなく次は自分の番だった。

春樹が赤峰の前に行くと

「じゃあ、あなたが最後ね志木野君魔法結晶石に魔力を込めてみて」と、言われた春樹は魔法結晶石に魔力をこめるとバチバチといいだし「志木野君の属性は雷ですね。じゃあこのまま魔法結晶石に変換するから

ちょっと待つて下さいね。」

赤峰がそう言うと作業をしだしたので春樹は赤峰の方を見ながら（作業はかなり早いな、ランクは一条と同じ位か・・・）

と、考えていると

「はい。完了しました。どうぞこれが志木野君の魔法結晶石です。」

と、言われ魔法結晶石を渡されたので春樹は

「ありがとうございます。」

と、一言だけ表情を変えずお礼を言った。それを赤峰の後ろで見ていた一条が

「じゃあ皆変換作業終わつたよね。まあ皆はこれから二年間は赤峰さん

にお世話になると思つからちちゃんとお礼言つとく事」

と、言われた赤峰は赤面し

「いやいやいいですよえーと皆さん私は学校校内の6番地区でお店出して

ますので補充の時とかはよろしくお願ひします。」

赤峰はそれだけ全員に伝えると部屋から出て行つた。

「じゃあ皆最後の検査に行こつか、最後の検査はここじゃなくて外でやるから

付いて来て。」

一条はそお言い全員一条の後を付いて行くとグラウンドの方へと向かつた

どうやら次の検査はグラウンドで行うらしい
グラウンドに付くと一一条の説明が始まった。

「えーとここでは普通の高校と同じで皆には今から100mを全力で走つてもらうね。

とりあえず皆の体力が今どれだけあるかの検査だから。 まあまだ色々検査も残ってるん

だけど今日は時間もあまり無いからこれで最後」と、一一条が言うとそれを聞いていた女生徒達が

「先生私達スカートなんんですけど」

と、言う最もな反論が出てきた。それを聞いた一一条は「先男子の方からするから女子は着替えてきて。」

と、一一条が言うと

「わかりました。」

と、言い女子達は着替えて教室へと戻つて行つた。

「じゃあ男子から走つてもらうね。」

「一一条はストップウォッチを出しスタートラインへ行くと

「時間も無いし五人ずつでお願いね。」

と、言われた男子達は全力で走つて行つた。そして最後の走者は春樹、蓮司、ロイ、の三人だったので蓮司の思いつきで一番遅かった奴ジユースおじりという新ルールが作られ負けるのがいや

だつた春樹は少し本氣で走りゴールするとかなりの好タイムだつたらしく

おおーと囁つ声が上がつた。 ちなみにこの賭けの敗者は蓮司で春樹、ロイにジユースをしぶしぶおじりていた。

今日の検査が全て終わり寮に戻り夕御飯を済ませ自分の部屋に戻り明日の

準備を行いふつと思い出し春樹は制服のポケットにいればなしだつた魔法結晶石を取り出し少し眺め自分の机の上に置いた。その傍には別の魔法結晶石が一つ置いてあつた。

魔法力検査と模擬戦1（後書き）

「うひゃあ、やつと魔法が出てきます。

まだ使用はしませんが・・・

魔法力検査と模擬戦 2

検査が終わり生徒が全員帰宅し担任の一一条未来は潜在魔力検査の結果を職員室で待っていた。一一条が自分の席に座りコーヒーを飲んでいると一一条の元に中年の眼鏡をかけた教師がきて自分の席で難しそうな顔で「コーヒーを飲んでいる一一条に話かけてくる

「一一条先生どうでした？検査の方は収穫ありましたか？」
と、その中年の教師もコーヒーを飲みながら一一条に問い合わせると
「あ、斎藤先生お疲れ様です。一応今検査結果待ちなんんですけど
私がみた感じでは中々の子達が多くつたですね。」

「一一条がそう答えると中年教師斎藤は興味深そうに
「ほおーまあ今年の生徒達は豊作ですからね。先生の所にも将来
が楽しみな子達が
たくさんいますしね。」

中年教師斎藤が自分のあごを触りながら言う

「えーとイギリス貴族の名家ハーゲンボルト家、関西で有名な大峰

家そして日本

が誇る四季の一族冬野家凄いですよね他にも将来楽しみな子がいますしね」

と、斎藤が言うと、一一条少し嬉しそうに

「そうですよこれからが凄く楽しみです。でも一人だけ全く読めない子がいるんですよ。」

「一条がそう言つと。『一ヒー』を飲んでいた斎藤が飲むのを止め

「先生それは誰なんですか？」

斎藤がそう聞くと一条は

「今日から登校してきた。志木野春樹なんですけど。何か一人だけ違うん

ですよね。大人びてると言うか凄く冷めているというか属性検査の時も

自分の属性が分かった時も無表情なんですね。なんか最初から自分の属性が分かつていていた様な感じだつたんですよ。」

と、一条が言つと

「あ、彼ですか模擬戦でアレックス先生を倒したって言つ子ですね？」

の中年教師斎藤が聞くと

「ええ、そうです。アレックス先生を模擬戦で倒した子です。」

と一条が言つと

「凄いですねもしかしたらかなりの大物になるかもしれないですよ。

」と、中年教師斎藤が言つと一条は

「そうだといいんですけど・・・。」

一条は少し不安そうに言つた。

「あ、一条先生潜在魔力の検査届いてますよ。

中年教師斎藤が言つと一条は届いたばかりの書類に目を通していく。その内容は今日検査を受けた生徒達の潜在魔力の数値が書かれてる。二条がその内容に目を通していく。

その姿を見ていた中年教師斎藤が

「どうですか一条先生内容は？」

と、書類に目を通す一条に尋ねる。

「そうですねやっぱりレイラと雪音は凄いですねこの年でこれだけの潜在魔力将来楽しみ。」

と、一一条は嬉しそうに書類に目を通していたが急にその手が止まる。「…………何これ 齋藤先生ちょっとこれ見て下さい。」と、かなり驚いた一一条に言われた中年教師齊藤は一一条に手渡された書類に目を通す

「これどう思います?」

一一条が中年教師の齊藤に聞くと

「…………こんなのは初めて見ましたよ。何ですかこれ測定不能って。」

中年教師の齊藤もかなり驚いた顔をしている。

「こんな事つてあるんですかね?」

一一条がかなり驚いている齊藤に聞くと

「いやあー私も分からぬです。 とりあえずこの件は私の方で教頭先生に回します。」

と、中年教師の齊藤が言つと一一条は少し不安そうな顔をして

「わかりました。 この件は齊藤先生にお任せします。」

と、言つと一一条は書類を齊藤に手渡した。

朝春樹が田覚めると嫌な夢を見たせいか寝汗がビッショリであった。

「…………また昔の夢か、朝から気分が悪い」

春樹ははうんざりした顔をするとシャワーだけ浴びて学校へと向かつて行く

昨日は遅刻したので今日は時間に余裕を持ち昨日より早い時間に寮を出て行く

学校へ行く通学路の途中で昨日冬野雪音に会った場所を通りが今日は昨日より

早く出たためか冬野雪音の姿は無かった。

春樹が学校に着き教室に行くと昨日より30分以上早く着いたのだ

がもう半数以上

の生徒達が来て自習や仲のいい者どひで集まり雑談等を行つてい
たので春樹は黙つて

自分の席に着いた。春樹は今日見た夢の内容がうそぞりな内容だつ
たので朝からピリピリ

していた。だが全く空氣を読まない蓮司は休み時間に話しかけてく
る春樹は適当に話を
流していくが今朝の夢の事を考へているとどんなイライラして
くる。

午前中の授業が終わり昼食の時間になると春樹のイライラもかなり
解消されていて

昨日と同じメンバーで昼食を食べていると長谷川美羽が春樹に
「ねえ春樹君今朝何があったの？」

長谷川美羽がおしゃるおしゃる春樹に聞いてくる。

「うん。何で？」

春樹がそう美羽に聞くと

「なんか朝から春樹君ピリピリしてたから何か話しつぶかっから。
」

と、美羽が言つてきたするとレイラも

「そうですね。このわたくしが朝から話かけても適用に返事されま
したわ。

と美羽とレイラに言われた春樹は

「二人とも、ゴメン。今日昔の嫌な夢見て少しライラライラしてた。」

春樹が素直に謝ると美羽とレイラはまさかこんなに素直に謝るとは
思つてい

なかつたので美羽が右手をブンブン振りながら

「う、うんうん全然いいよ。」

と、言いレイラも

「や、そうですね。そんなに謝らないで下さい。」

と、言うと一人は赤面しながら食事を続ける。すると横に座つてい
た蓮司が

「春樹いやな夢つてなんやつたん?」

そんな事を蓮司が聞いてくる。春樹は少し黙り

「・・・昔の夢だよ。昔のな・・・」

春樹が少し神妙な顔で言つとその話を聞いていたロイが

「まあ、蓮司いいじやない人には喋りたくない事もあるしさ。」

ロイがそう言つと蓮司は

「まあ、そおやな。」

と、言うと蓮司は食事の続きを始めたので全員で昼食の続きを行った。

昼食が終わり教室に戻り午後の授業が始まった。

今日の授業も眠気を誘う内容であり春樹はうとうとしているしきで授業が

終わり他の生徒が移動の準備をしだしたので春樹も立ち上がり蓮司とロイの

三人で昨日検査が行われた部屋へと移動した。 今回は早く教室も出たので

走つて行く事もなくゆっくりと部屋へと向かった。移動中にロイに

「春樹、授業中いつも寝てるね。 あまり寝てばかりいると本当に危ないよ

しかも春樹あんまり勉強得意じやないよね。 テストの時点数取れないと留年の可能性も出でてくるから。

とロイが心配そうに言つてくる

「まあ確かに俺は勉強は得意じや無い。 だがテストの時はビッグに

かするから

大丈夫だ。」

春樹が自身満々で言つてきたのでロイは

「まあ春樹が大丈夫って言つんだつたらいいけど。」

ロイがあんまり信用して無さそつた顔で言つがあまりに春樹が自信満々だったの

で話を切り上げた。

昨日の広い部屋に着き担任の一一条が現れ今日の授業の内容の説明を行つ

「今日は皆に魔装具まやうぐの話をするね。」

一一条がいつもの笑顔で話しを進める。

「魔装具って言つのは現代の魔術、魔法結晶石だけじゃ使用する事は出来ない

から魔装具を媒体にして使用するの。まあ魔装具って大袈裟な名前だけど

魔法結晶石を使わなかつたらただの武器なんだけどだから皆が一番使いやすい

魔装具を見つけなきや駄目なのちなみに私の魔装具はこれ。

一一条がそう言つと自分の内ポケットから銃を取り出した。

それを見た生徒達は

「おおー」

と、言う声が上がつてゐる。その中で春樹は一一条の銃を見て分析をする。

(あれはベレッタか少し改造されてるが確かあのモーテルは装弾数は15発つて所か。)

春樹は色々分析してると一一条が話しを続ける。

「じゃあ今から魔装具のサンプル見せるから付いて来て。」

一一条が部屋から出てすぐ隣にある部屋に行くとその部屋はまるで武器庫の様な部屋であつた。

「じゃあ皆この中で自分が一番使いやすいと思つ魔装具を探してね。ちなみに

に全部レプリカだから使用は出来ないから」と部屋の真ん中に立ち説明を行つ

「じゃあ田ぼしこのがあつたら魔装具の前に番号があるから控えて

おいてね。」

と、言うと生徒達はそれぞれに散らばつて行く。春樹達も色々と見ていく

蓮司、ロイはかなりテンションが上がりまるで子供の様にはしゃいでいた。

「なあロイお前どんな魔装具にするんや?」

と、かなりはしゃいでいる蓮司はロイに尋ねる

「そーだな。僕はやっぱり拳銃かな昔からアメリカで使つてたし。

蓮司は

どんなのにするの?」

と、答えると、蓮司は色々キヨロキヨロしながら

「うーんやっぱり俺はこれかな。」

蓮司はかなり悩み拳に付けるナックルのサンプルを持つてきた。

「そつか蓮司はそれが一番似合つよ。」

と、ロイに言われ蓮司はかなり嬉しそうにして

「そーやろやっぱ男は拳やで。」

蓮司はかなり男臭い事を言つすると蓮司は春樹の方を見ると

「春樹はどれにするか決まつたんか?」

と、興味なさそうにしていた春樹に聞くと

「そーだな取り合えずこれかな。」

春樹が選んだのは日本刀であった。すると蓮司は

「ふーんめずらしこの時勢に刀とは今時使つてる奴も少ないぞ。」

蓮司が言つことは正しきマーロッパの方では未だに騎士の制度もあるので

使う人間は多いが日本では日本刀より拳銃の方がポピュラーな武器になつてゐる

ので使用する人間は殆どいない。

「まあ俺は銃はあんまり得意じゃ無いからこれでいい。」

春樹がそう言つと周りを見ると他のクラスメイトもほぼ同じの魔装具に

するか決まつたらしく担任の一條に番号がかかるた紙を渡していたので

春樹達も番号の書かれた紙を渡すと担任の一條が

「じゃあ皆全員決ましたよね。分明日のこの時間には渡せると思つから

明日は魔装具を使った授業もするから皆予習だけとしてね。じゃあ今日の

授業は終わりだから各自解散。」

と、言うと一條は集めた髪を持つて部屋から出て行った。春樹達

も教室に戻り

寮へと帰つていった。

寮に着き春樹が部屋でゆつぐつしているときなり扉を叩かれドアを開けると

そこには蓮司とロイが立つておつじや今から明日の復習二人でやると言つ事に

なり深夜まで付き合わされる羽田になつた。終わつた頃にはもう

ヘトヘト

だつたのでそのまま眠りにつく。

(春樹、最近楽しそうだね。)

「そーか?」

(うん。最近見ててそういう思つよ。 そういう思つよね夏陽^{なつひ})

(秋人の言つ通りだ。いいのか春樹あまり仲良くしき

ぎるとお前が辛いだけだ。)

「分かつてる。」

(僕達は高校生をする為にここにいる訳じゃない。 田舎の為にいるんだ

春樹それを忘れないでね。)

「・・・・ああ

そして夜が更けていった。

魔法力検査と模擬戦2（後書き）

いいままでいかがでしょうか。初めての作品になるので、ちゃんと作品として成り立つてゐるのか心配になつています。

今日の田覚めは昨日とは違い、かなり田覚めが良く清々しい気分になつた。

春樹は昨日と同じくらいに寮出て学校へと向かつ。その途中で冬野雪音ふゆのゆきねと、会った桜並木の下を通りが今日も冬野雪音はその場所には居なかつた。

(・・・・・桜も、もう終わりだな。)

春樹はもうほとんど散つてしまつた。桜を見上げなら学校への道を歩いた。

春樹が校庭を歩いていると、後ろの方から

「あつ春樹君~。」

と、春樹を呼ぶ声が聞こえたので春樹が立ち止まり後ろへ振り返ると長谷川美羽が手を振りながら春樹の下に走ってきて

「春樹君おはよ。早いね朝来るの。」

と、長谷川美羽に言われ

「ああ、美羽おはよ。まあ初登校の日遅刻したからなこれ以上二条に

怒られるのもイヤだからな。」

と春樹は苦虫を潰したような顔をすると

「まあそうだよね。二条先生怒つたら怖いしね。」

長谷川美羽はそう言いながらクスクスと笑う。

春樹と長谷川美羽が一人で歩いていると急に

「あつそつだ。春樹君携帯の番号交換しようつよ。」

と、長谷川美羽が自分の携帯を取り出しだして

「ああいこよ。」

と言つと春樹も自分の携帯を鞄の奥から取り出した
「じゃあ赤外線で送るから。」

長谷川美羽とアドレスを交換を行つた。

すると長谷川美羽は小さくガツツポーズし

かなり小さな声で

「やつた。電話番号ゲット。」

かなり嬉しそうに言つた。それを見ていた春樹は
「美羽いつたいどうしたんだ？」

春樹が不思議そうに長谷川美羽に聞くと

「う、うんうん何でもないよ。」

長谷川美羽が顔を赤面しながら右手をブンブン振りながらそつと言つ。

「うん？変な奴だな。」

と、顔を真っ赤にした長谷川美羽と春樹は一人で教室へと向かつた。教室に着くと春樹がぼーっとしていると教室の後ろのドアが開き金髪巻き髪のレイラが

「あり、春樹さん。早いんですね。」

と、言いいながら春樹の席の横に立つ

「うん？ああレイラかおはよ。」

と、春樹が言つと

「あ、ええ、おはよ！」ぞこします。」

レイラが意外そうな顔でそつと言つ。

「なんだよ。レイラその意外そうな顔は。」

と春樹が言つと

「いえ。まさかそんな素直に挨拶が返つてくるとは思つていなかつたので。」

と、レイラが言つと春樹は少し呆れた顔で
「なんだよそれ。俺だつて挨拶位する。」

と、春樹が言つと

「まあ、そうですよね。」

と、レイラが言つと自分の席へと着いた。

(こつたいなんだつたんだ。)

春樹が自分の席で今のを考えているとエラの始まりのチャイムが鳴り担任の一一条が

教室に入ってきた。一一条は出席簿をパンパン叩きながら教壇に立つと今日の授業

内容の説明を行つ。

「じゅあみんな今日は一口魔法学の授業だから覚悟してね。」

一一条は満面の笑みを浮かべながら話を続ける。

「じゅあこのエラ終わつたら前渡した魔法結晶石持つて昨日の部屋に皆来てね。」

と、一一条はかなり短いエラを行つと教室を後にした。

春樹は荷物をまとめて教室から出ようとすると朝から元気な蓮司が

「ちよつと春樹待てよ。」

蓮司が教室から出ようとしていた春樹を呼び止める。

春樹が蓮司の方に振り返り

「うん?なんだ。」

と、春樹が答えると

「春樹お前なあ親友置いて行くとは何事や。」

と、蓮司が言う春樹は少し考え

「・・・俺達親友だつたのか?」

と、春樹が答えると蓮司は頭を抱えながら

「お前、ホンマ冷たいなロイやつたら喜んでくれるで。なあロイ。」

と、蓮司は横に立っていたロイに急にふるとロイは少し困惑した顔で

「え?あ、ううんそうだよ。」

と、ロイはいきなりなんで僕に言いつのまつて顔をで答えた。

春樹はこのままではこな話がいつまでたつても終わらないと思い。

「蓮司、ロイ早く行くぞ。遅刻したらまた一一条に怒られる。」

と、言い春樹は歩き出す。その後ろを蓮司とロイが

「おー。ちよつと待つてくれよ。」

と、言いながら後を追いかけてきた。

指定された部屋に着くと一一条がもう部屋に居て授業に準備を行っていた。

「関心、関心誰一人遅刻者無し。じゃちょっと早いけど授業始めよっか」

と、言いながら説明を続ける。

「じゃあ最初に「魔装具」^{まつとうぐ}渡すね。えーと今から名前呼ぶから呼ばれたら前に来てね。」

と、一一条が言うと一人ずつ生徒を呼んでいく

「じゃあ次春樹前に来て。」

一一条に呼ばれ前に出て魔装具を受け取る

「春樹が選んだ魔装具扱い難しいと思うけど頑張ってね。」

と一一条に言われた春樹は

「まあ努力します。」

と、一言だけ言うと右手に魔装具を持ち後ろに下がった。

「じゃあ皆さん渡つたよねじゃあ今日の授業の説明するね 今日は魔術も使うから

ふざけないで聞いてね。」

一一条が真剣な顔で続ける

「魔術は危険な物だから簡単に人を傷つける事も出来るし人を殺める事も出来る

だから皆その事を忘れないでね。」

と、真剣な顔で話をしていたが

「じゃあ今から私が今から魔術使つて見るから良くみてね。」

一一条が内ポケットから愛銃のベレッタを取り出し右手に持ち魔法結

晶石を左手

に持ち魔法結晶石をベレッタの上にかざすと魔法結晶石が光ベレッタの中に

消えていく

「はい、これで完了。じゃあ一回見せるから」と、一一条が言うと銃口を壁に向ける。

「じゃあまずは通常弾。」

と、言うと壁に向けて引き金を引く

「バーン」

と言う音を鳴らし壁に着弾し壁に穴を開ける。その音を聞いた数人の生徒が驚いている。

「じゃあ次は魔術弾を撃つから。」

と、一條が再び構え壁に向けて撃つ

「バーン」

先ほど同じように壁に当たる先ほどに通常弾は壁に穴を開けた。だが今回のは

壁がズタズタに引き裂かれている。

(この壁の壊し方・・・属性は風か。)

春樹が考へていると一條が

「はい。これが通常弾と魔術弾の差だよ。ちなみに私の属性は風だからこんな

感じなんだけど、違う属性で行えば全然結果は変わってくるの。火で行えば着弾と

同時に燃え出し、水で行えば壁は斬られる、土で行えば壁は崩れる、雷で行えば

内部から破壊される。まあまだ皆の魔力じゃこうはならないと思つ。

じゃあ皆今

私がしたように魔装具を持つてやつてみて。最初は難しいと思つたが慣れたら簡単

だから。」

と、一條が言うと全員が一斉に行つ。

(さてさて皆の実力拝見、拝見)

と、一一条は笑いながら全員の方を見る。だがこの作業はかなり難しく全員苦戦していた

「うーん。難しい。」

「くそお出来ない。」

かなり苦戦している生徒が目立つその中で

「出来ましたわ。先生見て下さい。」

と、レイラが大きな声で言うと一一条がレイラの元に近寄り

「どれどれちょっと見せて。」

と一一条が言うとレイラは右手にレイピアを持ち左手に魔法結晶石を持つそしてレイピアに

かざすと魔法結晶石は淡く光レイピアの中に消えていった。

「どうですか先生成功ですか？」

と、レイラが聞くと一一条は

「OK成功だよ。」

と、言うとレイラは

「どうですか皆さんわたくしの実力見ましたか

と、どうや顔で言う

「でもレイラ展開する時間がまだかかり過ぎだからもっと短縮出来る様に頑張って。」

と一一条が言うと

「任せて下さい先生。わたくしレイラ・ハーゲンボルトの実力見せ付けますわ。」

と、言うとレイラは再び練習を行つ。

(さすがレイラまさかこんな短時間でここまで出来るようになると
は。)

一一条はそう考へながら周りを見渡す。すると冬野雪音と田代が会つ
て、冬野雪音に聞くと

「はー。」

と、表情を変えず一言答える

「じやあ雪音ちょっとやってみて」

一條がそつと冬野雪音は自分の魔装具を右手に持ち魔法結晶石を自分の拳銃にかざすと淡い光と共に冬野雪音の拳銃に消えていくその速度

拳銃にかざすと淡い光と共に冬野雪音の拳銃に消えていくその速度はレイラ

とは比べられない速度で消えた

（早い！　レイラも初めてにしては早かつたけど雪音はそれ以上に早い。

展開速度だけなら2年生と変わらない。）

「じゃあ雪音一回そのまままで撃つてみて。」

一條にそつと冬野雪音は壁の方に銃口を向け引き金を引くと放たれた

銃弾は着弾と同時に壁を凍らせた。

「うん。雪音合格」

と、言つと冬野雪音はすつとその場所から離れ遠くで全員が終わるの待つ

それを見ていたレイラは苦虫を潰した様な顔をしている。

（さすが四季の一族冬野家の跡継ぎ。才能が凄い。今のこの時期で）

この実力。普通ならまだ展開がやつとなのに

一條が関心してとふつと春樹の方を見ると春樹は壁の前に立っていた

「どーしたの春樹？」

と一條が聞いてくるが春樹はそれを無視し刀を抜刀し魔法結晶石をかざすと

淡く光すぐ消える。春樹はそれを確認すると壁に斬りつけようと

「バチバチ」

と、音ともに壁が内部から崩れた。

春樹はそのあとを見ながら

「刀が悪いな。安物過ぎる。結構本氣で斬りにいったのこの程度の破壊しか

出来ない。」

春樹がブツブツと一人で喋つていると。 周りの生徒が集まつてく
る。

「志木野君凄い。」

「志木野お前一体何者なんだよ。」

等々春樹はしまつたと顔をしながら

「いや、まあ、たまたまだ。」

と、適当にはばぶらかし逃げるよう壁際まで下がる。

「こらこらみんなも自分の作業に戻る。」

一一条が手をパチパチと鳴らしながら集まつていた生徒の方へ行くと
「はーい。」

と、言つて自分の練習に戻る。 一一条は春樹が斬りつけた壁を横目で
チラッと見ながら

（凄い太刀筋、綺麗に壁が斬られてる。 しかも春樹の属性雷の内部
破壊

もされてる。 展開も速かつたし、だけどなにより一番驚いたのは

春樹
の属性の雷が刀にも帶電してた。」

「魔法結晶石」

を使った魔術にも種類がある。 冬野雪音が使つた魔術は着弾したと
同時に壁を凍らせた。 この魔術は一番初歩の魔術でこの学校の一年生で
習える

魔術である。 それに対しても春樹は使用した魔術は常に魔術が展開さ
れた
状態で維持して使える魔術。 こちらは難易度が高く普通入学した
ばかりの一年が使える魔術では無く使用するにはかなりの時間と努力
が必要になる。

(「この魔術をまだ入学して数日で使つなんて、志木野春樹、彼は一体何者なの。）

と、考えながら壁際に座つてゐる春樹を見る。

(まあちょっと彼の事は調べた方がいいかな。 とりあえずこの件は後で報告ね)

と、考えをまとめると一一条は他の生徒の方を見る。一一条に見られていた事に

気が付いていた春樹は

(・・・・まずかつたな。つい魔術を使つてしまつた。まさかあの程度で

ここまで田立つとは。 またあいつ等にビビサレれるな。）

春樹は小さくため息をついた。 全員が練習をじいろの椅子に座りながら

見ていた一一条が急に立ち上がり

「はい、みんな今日はここまで。」

と、一一条が言つと

「なんでやねん。未来ちゃんまだお腹やのにもう終わるん?・・・）

と、蓮司が不満な顔を浮かべながら一一条に言つと

「あれ? 昨日言わなかつたけ今日半日授業だよ。」

と、一一条が言つと

「うそやん。ロイそんなんやうとつた?・・・

と、蓮司がロイに言つと

「うんうん。僕も聞いてなによ。」

と、ロイも答えると一一条はあれえと言つ顔を浮かべ

「・・・・言つてなかつたけ。」

と、一一条が全員に聞くと

「聞いてません。」

と、全員が答える。

「・・・・・ゴメン伝え忘れてたかも。」

一一条が笑いながら逃げる様に部屋から出て行った。

魔法力検査と模擬戦3（後書き）

おわりく明日は投稿出来ないと思こます・・・

担任の一條が逃げる様に部屋から出て行き部屋に置きやれにされた生徒達は

最初は啞然としたが今は各自で自主練を行っていた。
春樹は自主練する必要も無かつたので部屋から出て校内を歩いていた。

（今日の授業ももう終わったし。少し早いが帰るか。）
と、春樹が帰ろうかなと思い教室に向かっていると不意に携帯が鳴り出し

春樹が自分の制服のポケット携帯を取り出し携帯の液晶画面を見る
と今日の

朝アドレスを交換した長谷川美羽はせがわみうからの初メールであった。

「春樹君もう帰るの？」

と、メールが来たので春樹は

「一応」

と、一言だけ返信すると、春樹がまた歩き出すとまた携帯が鳴りまたポケット

から取り出すとまた長谷川美羽からで

「春樹君今日このあと予定ある？」

と、メールが返ってきたので

「別に特に無し。今から寮へ帰ると」。

と、返すしポケットに入れようと思つた瞬間にまた携帯が鳴り春樹が携帯を見ると

今度はメールでは無く電話だったので春樹が電話に出ると

「あ、春樹君今日このあと予定無いんだつたらちよつと付き合つて

くらいいかな？」

と、長谷川美羽が言つてくるので
「付き合つて何かするのか？」

と、春樹が聞くと

「うん。あの、今日の実技の授業展開出来なかつただよね。」
と、言う長谷川美羽はいつも元気はあまり無く少し落ち込んでい
る様な声

だつたので

「美羽魔法結晶石の展開が出来ないのか？」

と、春樹が聞くと

「うん。そなんだ。だから少しコツとか教えてくれないかな？」

と、長谷川美羽が言うので

「俺、人に教えるとかした事ないんだが。」

と、答えると

「うん。それでも全然いいから教えてくれないかな。」

と、長谷川美羽が言うので春樹は少し考え

(・・・まあ、今日は特に予定も無いからな)
「別にいいが、何度も言つが教えるのはした事無いからな。

と、春樹が答えると長谷川美羽は嬉しそうに

「ありがとう、春樹君じゃあ今使つてた部屋は授業でしか使えない
から

第三アリーナの方で練習見てもうつてもいいかな？」

と、長谷川美羽に言われた春樹は

「わかつた。第三アリーナだな。」

と、言い春樹は電話を切る。

この学校には授業で使う教室と個人練習を行える場所があり第一ア
リーナから

第五アリーナまで存在する。このアリーナはかなり広大で個人練習
から一対一の

戦闘多人数の戦闘まで行つ事が可能である。

長谷川美羽に指定されたアリーナに着くと長谷川美羽はアリーナの入り口の

前に立つておりそちらに近づくと長谷川美羽は春樹に気が付いたらしく

春樹の方に駆け寄ってきて

「ゴメンね春樹君」

と長谷川美羽が少し申し訳なさそうにだかどこか少し嬉しそうな表情で言う

「まあ、今日は別に予定も無かったからな」と、言つと
「セーなんだ。じゃあ今日はよろしくお願ひします。」

と、長谷川美羽が笑顔で言こ

「ああ出来るだけ俺も頑張るよ。」

と春樹が言いアリーナに入ろうと思いつい歩き出したら

「あら、美羽、春樹さん一人で何をしていますの？」

と、後ろから声をかけられ春樹と長谷川美羽が振り返るとそこにはレイラが居て

そしてこちらへ近づいてきた

「美羽、あなた今日用事があるつていつてませんでした。」

と、レイラに言われた長谷川美羽は

「え、えつと、そう予定が無くなつたの。」

と、少し焦つた顔で答える

「美羽ちよつとこちらに来なさい。」

と、あきらかに疑つてゐるレイラが長谷川美羽を自分の元に呼びつける

すると長谷川美羽はビクビクしながらレイラの元に近づくそして春

樹から

少し離れた所に行くと

「美羽、どういうつもりですの。」

と、レイラが言つと

「な、何が？」

と、長谷川美羽があきらかに動搖しながら答える
「何がじゃありませんわ。春樹さんに練習を見て貰つのは一人でつ
と言つ話

じやなかつたのすの?」

と、かなりお怒りのレイラに言われた長谷川美羽は
「じめんなさい。」

と、少し泣きそうな顔で長谷川美羽が言つと
「まあ、分かつたのならいいですわ。」

と、レイラがため息を付きながら言い

「春樹さん。今日わたくしも見てもらつていいでですか?」

と、アリーナの入り口で待たされていた春樹に言つと

「ああ。まあいいぞ。」

と、答えると

「じやあよろしくお願ひいたしますわ。」

と、レイラが答えると嬉しそうなレイラと少し残念そうな長谷川美羽が

春樹の元に帰つて來たので三人で練習の為アリーナに入る。

「えーとレイラも魔法結晶石の展開が出来ないのか?」

と、春樹の横を歩いていたレイラに聞くと

「わたくし展開は出来ます。その先が中々出来ないのであります。」

と、レイラが歩きながら答える

「と、言つことはあと少しつて所だな。まああとで一回見せてく
れ。」

と、春樹が答えると

「春樹君私の事も忘れないでね。」

と、長谷川美羽に言われた春樹は

「ああ。分かつてる。美羽もちゃんと見てやる。」

と、同じく春樹の横を歩く長谷川美羽に言つているとアリーナの前に到着

し扉を開ける。アリーナの扉はかなり分厚くおそらく通常の銃弾で

は貫通する

事も出来ないような分厚さである。

扉を開き中に入ると他のクラスの生徒も練習を行つていてアリーナの中はかなり

賑わっていた。春樹達はその中で人が余りいない場所に移動し
「まあこのあたりなら人もいないからいいか。」

と、春樹が言うと側にいた長谷川美羽とレイラも頷きながら

「まあこのわたくしの実力を見せ付けて嫉妬の対象されても困りますからね」

と、レイラは自信満々に言うそれとは対照的に長谷川美羽は

「うん。ここだつたら失敗しても目立たないからいい。」

と、言う。春樹はその二人の言葉を聞いてため息を付く

「まあいいや。じゃあとりあえず美羽一回やつて見せてくれ。」

と、春樹が言うと長谷川美羽が

「うん。わかつた・・・」

と、少し元気の無い声で答えると自分の鞄から魔装具を取り出し右手に持ち左手で自分の首にかけていた魔法結晶石を持つと一瞬光るが直ぐ

に光が消えてしまう、長谷川美羽は何度も行つが何度も行つても結果は変

わらず一瞬光るが直ぐに光が消えるの繰り返しだつたのでその様子を見ていた春樹が

「美羽・・・コツて言うわけじゃないが俺がいつも魔術を使うときには心掛けている事が一つだけある。」

と、春樹が言うともうやけ氣味で行つていた長谷川美羽が春樹の方に振り返る

「それはな・・・自分を信じる事だ。心の中に少しでも迷いがあるとそれに

影響して魔術も使用出来なくなる。だから自分を信じる。これが俺

からのアドバイスだ。」

と、春樹が言うと泣きそつた顔をしていた長谷川美羽は自分の眼を擦り

「ありがと春樹君。わかった一回やつてみる。」

と、長谷川美羽が言うと魔法結晶石を握りしめ一人でブツブツと言ひながら

展開を行つていく。

長谷川美羽が一段落したので次はレイラの番なのでレイラの方を見るとレイラ

は自身の魔装具レイピアを構えて展開を行い魔法結晶石がレイピアの中に消えた

と同時にレイピアをアリーナの中にある的に突き刺しレイピアを引き抜くが突

き刺した後はあるのだが殆どレイラの属性雷の内部破壊は行われていなかつた。

その突き刺した後をレイラが確認し

「全然ですわ。」

と、呴きながら何度も同じ行為を行う。

その行為を横から見ていた春樹は一つの疑問に気付き

「レイラ。展開からもう一度やつみてくれ。」

と、春樹が言うとレイラは首を傾げながら

「わかりましたわ。」と、言い一度展開を解除しました一番最初からやり直す。

その手順を見ていた春樹が

「レイラ、ストップ。」

と、展開を行つていたレイラを一度止め見付けた問題点をレイラに説明する。

「レイラ、おそらく魔術が上手くいかないのは今の所だ。」

と、春樹が指摘すると「今のわたくしの一連の流れの何処に問題があるんですの」

と、そんな事があるはずが無いと言ひ顔で春樹の方を見るが春樹は淡々と話を続ける。

「レイラの展開の速度は確かに早いんだか問題はその速度にある。レイラの場合まだ魔術を使うのに慣れていないから展開の速度にレイラ自身がついて

行けてないんだ。だから展開速度を一度さつきの半分まで下げてやってみろ。」

と、春樹に言われその内容に納得したレイラは

「わかりましたわ。春樹さんのいった通りにやってみますわ。」

と、春樹に言われた通りに展開速度を先程より半分以上落として慎重に行うとまだ

完璧とは言えないがかなり上手くなつた

「出来ましたわ。いかがですか春樹さん？」

と、レイラが嬉しそうに春樹に聞き

「ああ。出来てると思う。あとはその感覚を忘れずにやっていつたら大丈夫だと思ひ。」

と、言うとレイラの表情が明るくなり小さくガツツポーズまでしていた。

長谷川美羽とレイラの練習を見るといつ行為も1時間立つと長谷川美羽も

まだ何度も失敗することもあるがそれでもかなり展開が上手くなつていた。

「美羽かなり良くなつてきたな。」

と、言うと長谷川美羽は嬉しそうにサインをしていると、春樹の横から

「おい、あいつ見たか魔法結晶石の展開どれだけかかるんだよ」と、声が聞こえ春樹が横目で見るといつまにか春樹達の側に男子生徒が

集まり長谷川美羽を指差し

「確かに。展開位でどれだけ時間がかかるんだよ。」

と、春樹達に聞こえる位の声で喋り笑っている。それを聞いた長谷川美羽は

顔を真っ赤にして下を向いている。そんな長谷川美羽を馬鹿にしていた男子

生徒に気が付いたレイラが

「あなた達一体何様なのですか。」

レイラが長谷川美羽を馬鹿にしている男子生徒の前に立ちそつ言い放つ。

「ああ、お前誰だよ。」

と、一番最初に長谷川美羽を馬鹿にした長髪の男子生徒がそうレイラに言つ。

「わたくし1? 4のレイラ・ハーゲンボルトですわ。」

と、レイラが言つと

「ハーゲンボルト？ ああイギリスの貴族様か 別にあんたには言つて無いだろ。」

と、長髪の男子生徒はレイラにそう言つと

「そちらの長谷川美羽はわたくしのお友達ですね。」

と、レイラが言つと

「長谷川・・・どつかで聞いたことある名前だな・・・ああ下位の一族か。」

と、長髪の男子生徒が思い出したかのように言つ

「まあ下位の一族だつたら仕方ないよな その程度の実力も納得行くぜ。」

と、馬鹿にして言い放つそれを聞いた長谷川美羽は眼に涙を溜めて奮えている。

その姿を見たレイラは火に油を注いだかの様に怒り長髪の男子生徒に近寄り長髪の

男子生徒に平手打ちをした。すると平手打ちされた男子生徒は

「お前何するんだよ」

と、右手を上げレイラの頬を叩こうとした瞬間春樹がその生徒の腕

を掴んでそれを止めた。

魔法力検査と模擬戦4（後書き）

あけましておめでとうございます。 今年も頑張って投稿していきます。

長髪の男子生徒がレイラの頬を叩くため右手を振り上げた瞬間春樹がその腕を掴みそれを止めていた。すると長髪の男子生徒はギロツと春樹を睨み

「ああんお前誰だよ」と、春樹に腕を掴まれながら長髪の男子生徒は睨んでくる。その回りにいた他の男子生徒も長髪男子生徒と同じく春樹を睨んでくるが春樹は動搖一つ見せる事も無く

「そこの一人のクラスメイトだ。」

と、春樹が顔色一つ変えずにそう言つと

「ああんお前関係無いだろ出てくるじゃねーよ」

長髪の男子生徒が春樹に掴まれていた右手を振りほどき春樹の正面に立つと

「この女はこの俺風間俊也の頬を叩きやがったんだ。やり返さないと気が済まないだよ。」

と、長髪の男子生徒は怒りを表にしている。だが春樹は冷静に

「それでも男が女を殴るのはダメだな。」

春樹は冷静に返すがレイラに頬を叩かれ怒りが収まらない長髪男子生徒は

「男女関係無いんだよその女は名家の風間の次期後継者を顔を叩きやがったやり返すのは当たり前だ！」

風間家

とは、日本の魔術師の一族で上級の貴族に当たる。現在日本にはこう言う魔術師の一族が多数ありその最上級が四季の一族になる長谷川家は階級もかなり低く一番下の下級貴族になる。

こういった一族の特徴は苗字に火水風雷土光のどれかが使われてお

りこの漢字を一切捻らず使つてゐる一族が上級貴族で長谷川家の様に少し漢字を捻り使われている一族が下級一族になる。因みに他国でもこれと似たような一族がありレイラのハーゲンボルトも名前に雷の意味を持つてるので上級貴族になる。

「確かに殴ったレイラが悪いのは認める。だが最初に喧嘩を売つて来たのはそっちだ。」

と、春樹が一步も引かずにつと風間俊也は春樹をジロッと見ながら

「お前名前は？」

と、風間俊也が春樹に聞く

「志木野春樹」

と、春樹が言つと風間俊也は少し考えそして

「知らねえな。てかお前名家でも無い奴が俺の腕を触ったのかよ。」

風間俊也は春樹の事を馬鹿にしながら言い後ろにいた他の生徒もケラケラと笑つてゐる。

基本魔術の学校に通う生徒は名家の人間や貴族の人間が多数を占めている。春樹の様に無名の家柄は少なくこいつは罵倒や卑下の対象になる事も少なくない。

春樹は小さくため息をつき

「・・・・こういうバカが国の上層部に行くから・・・・下らない事が繰り返されるんだ。」

と、春樹が小さな声ぽつり言つ。つ。

「ああん。お前今なんか言つたか？」

と、風間俊也が春樹に言つが春樹は眼も合わさず

「もつ、俺達帰りたいんだけどいいか？」

と、春樹が風間俊也に言つと馬鹿にしたような言い方で

「ああいいぜ。土下座して謝つたらな。」

と、風間俊也が言つと回りにいた男子生徒もげらげらと笑う。

春樹が馬鹿馬鹿しいと顔を浮かべ長谷川美羽とレイラの元に行こ

うと歩き始めた瞬間今まで笑っていた男子生徒が笑うのを止めて魔装具の銃を春樹に突き付ける。

「おいおい何処行くんだよ。」

と、春樹の頭の魔装具の銃を突き付ける。だが春樹は何も言わず歩みを進めるが他の男子生徒が春樹の前に回り込み同じく魔装具の銃口を春樹に向けるすると春樹は歩みを止め

「何のつもりだ？」

と、先程までは違う声も低くなりかなりの威圧感がある。そして前で銃口向けている男子生徒を睨みつけると男子生徒はビクッとして数歩後ろに下がる。それを見逃さなかつた春樹は直ぐさま体を前に屈みしアリーナの床を蹴る。すると五メートルはあつた距離が一瞬で縮み春樹の前で銃口を向けている男子生徒の右手を蹴り上げると、男子生徒の持つていた魔装具の銃が空を舞う男子生徒は何が起きたか解らないという表情を浮かべていが春樹は再び動き出す。唖然としている男子生徒の腹部に一撃を入れると直ぐさま次の行動に移る。またアリーナの床を蹴り次は春樹の後ろにいた男子生徒との距離を縮めていく。今回先程より少し距離があつたが男子生徒は反応出来ない。春樹は男子生徒の懷に入ると銃の引き金に自分の指を入れ発砲出来ない体勢にすると右手の拳を相手の腹部に一撃入れると男子生徒はその場に疼くまる。それを確認した春樹は男子生徒が持っていた魔装具の銃を奪い取り弾丸を全て抜き取り風間俊也の足元に投げる

「これで終わりだ。さっさと俺達の前から消えろ。」

と、殺氣が籠つた冷たい声で言つと啞然として見ていた風間俊也は「調子に乗つてんじゃねーぞおー！」

と、激昂した風間俊也は魔装具の銃を右手に持つと直ぐさま引き金に指をかけそれを引く

「ドーン」

と、言う発砲音と共に銃弾が発射され

「ガーンッ」

と言つ音共に壁に当たり壁をずたずたに切るがそれが貫通される事は無い。春樹はと言うと当たる瞬間に体を捻り銃弾を交わしていた。春樹に当たつていらない事に気が付いた風間俊也は

「くそお？！？」

と言ひながら春樹に向かつて魔術弾を何発も発砲をするが春樹は紙一重で全て交わしながら距離を縮めて行く

「何で当たんねえんだよ？！」

と、風間俊也が叫ぶと春樹は

「当たり前だ。素人の銃弾が俺に当たるわけ無いだろ。」

と、言い春樹と風間俊也の距離が遂に無くなり春樹は風間俊也の目の前に立ち春樹が風間俊也を睨みつける

「くそお、俺は風間家の入間だぞ。こんな事していいと思つてるのか。」

と、春樹に言い放つが春樹は鼻で笑い

「ふん・・・・そんな事知るか俺には・・・・関係の無い事だ。」

と、春樹が言うと風間俊也は銃口を春樹に向ける

「ここの、距離だつたら交わせねえだろ。」

と、言いながら引き金を引くが魔装具の銃から何も発砲されない「なー何で何も発砲しねえんだ。」

と、風間俊也は困惑しながら叫ぶ春樹はそれを見てため息を一つ付き

「通常の魔術師は銃弾を使う必要が無い。何故か解るか。」

と、春樹が風間俊也に言つが相手が返事する前に春樹は話を進めていく

「銃弾を使う必要が無いって言つのは銃弾に頼る必要性が無いって事だ。任務に当たる魔術師は殆どがCランク以上だからな、例え銃に弾が無くとも引き金を引くだけで魔術弾になる。今のお前みたいに弾丸が無いと使えない魔術弾なんて誰一人使わない。解るかそれがお前の限界だ。」

例えどれだけいい家系に生まれてもお前は俺には勝てない。」

と、春樹は風間俊也を見下しながら言つと風間俊也はワナワナと奮

え出し

「なめんじゃねーぞ」

と、風間俊也は右手の拳を握りしめ春樹に殴りかかるが春樹はその腕を掴み後ろに回り込み関節を決めながら首下に手刀を入れるとガクッと風間俊也の力が抜け倒れ込む。

それを見た春樹は一つ息を付き長谷川美羽とレイラの下に近寄り
「・・・行くか。」

と、春樹が言うと長谷川美羽とレイラは無言で春樹の後ろからついて来る。

アリーナを出ても校内を歩くがその間も三人に会話は無い。

そして校門の所に着くとレイラが

「じゃあわたくし達はこちらなので。」

と、いつものレイラの様な元気は無く春樹も一言

「・・・・ああ」

と、答えた。そして今まで黙っていた長谷川美羽は

「・・・・春樹君・・・今日は・・・ありがとう。嬉しかったよ・・・
・私の為に怒つてくれて。」

と、言い長谷川美羽とレイラと別れた。

春樹と別れた長谷川美羽とレイラは自分達の暮らしている寮に向かつて無言で歩いたが長谷川美羽が口を開く喋り出した

「・・・・・ねえレイラ、春樹君つて一体何物かな。」

と、レイラに尋ねると

「全く分からないですわ。」

と、歩きながら答える

「・・・・いい人だよね。」

と、長谷川美羽がレイラに再び尋ねると

「・・・・そうですね
と、レイラが答えた。

担任の一一条未来は今完全に忘れていた職員会議に参加していた。

「今年の新入生は有力な生徒が多いので恐らくこの中から騎士になるものも現れると思います。」

一年担任主任の壬生が全教職員の前でやう言へ張るするとそれを聞いていた一年、三年の教員は

「ほお？ 壬生先生がそんな事をいいますかそれは将来が楽しみですね。」

と、言い一年、三年の教員達は新入生の魔法力検査の結果に目を通していく

「流石冬野一族一年のこの次期で既にDランク相当の魔力ですか」と、一年の教員が驚きながら書類に目を通す。

「ハーゲンボルト家の御息女と風間家の弟の方もEランクも中々ですね。」

と、書類をペラペラとめくつていく

「あとは似たような感じですかね。」

と、全データを見終わり書類を机に置くと一一条が急に立ち上がり

「先生方に見ていただきたい生徒のデータがあるんです。」

と、一一条が言うとデータ用紙を全教員に配つて行くそれを見た全教員は黙り込み

「・・・・・」

すると一人の教員が口火を切り

「な、何ですかこの結果は。」

と、驚きを隠せない声で言うと

「そ、測定不能こんなの始めて見ましたよ。」

「一一条先生。測定機が故障してたんじやないんですか。」

と、結果を見た教員が聞くと

「いえ。何度検査をやり直しても結果は変わらないです。しかもこの生徒一年生で雷の属性の帶電が既に使えるんです。」

と、一一条が言うと他の教員達は驚きを隠せないようで

「入学したてで帶電が出来ると言う事は既にDランク以上の魔力を持つていてるって事ですか。」

と、他の教員達もこの話題で持ち切りであった。すると今まで黙っていた一人の教員

「・・・・・一一条先生この生徒のプロフィール有りますか?」

と、一人の教員が一一条に聞くと、今まで話をしていた全教職員が会話を止め全員が黙りこんだ。一一条はプロフィールが書いた書類を會議室の一番真ん中に座る老婆に書類を渡す老婆は一一条から渡された書類に目を通し終わると書類を机に置くと一人の教員が

「どーかされましたか夏目校長。」

と、教員が言うと

「いえ。何でもありません。会議を続けて下さい。」

と、夏目が言うと会議が再び始まった。夏目は会議を聞いていたが頭の中は先程見た書類の事を考えていた。

(先程見た書類の生徒確か名前は・・・志木野春樹昔何処かで会つた事があるような。何処だつたかしら・・・)

と、夏目は考えるが 何故か思い出せない

(最近年かしら)

と、夏目は考えながら会議にも耳を通していく。

長谷川美羽とレイラと別れた春樹は一人寮に帰つていた。

(春樹珍しかつたねあんなに怒る春樹見たのは久しぶりだつたよ)

「秋人か？ そうか別にそんな事は無い。」

（まあ確かにあれだけ怒った春樹を見たのはあの時以来だな。
「夏陽もそんな事は無い。と言つた昔の話もしなくて言い。」）

（そうだよ夏陽、春樹は昔の話されるの嫌いなんだから。）

「秋人もそう言う訳じゃ無いから」

と、うるさい一人にあーだこーだ言われ帰路に着いた。

魔力検査と模擬戦5（後書き）

ここから少しづつ春樹の過去が見えてくる予定

春樹が寮に着き、古めかし寮の階段を上がつていると、

「おう、春樹やないか。」

と、後ろから声をかけられた春樹は

「蓮司か、」

と、言ひうが足を止める事も振り返る事もせず、階段を上がつている
と一階から蓮司が走りながら

「ちょ、ちょ、ちょっと待たんかい春樹！？」

と、呼ばれた春樹は階段で立ち止まり、蓮司の方に振り返る。すると、蓮司は息を切らしながら、春樹の五段ほど下の階段に立つと、

「お前な、人呼んどんのに、何でガンガン先行くねん。」

と、蓮司が不満全開の顔で、春樹に問い合わせるが、春樹は

「で、何の用だ。」

と、春樹は蓮司の不満など全く気にする事も無く、早く用件をいえ、
とこう表情を浮かべると蓮司は肩を落としあつ諦めた様に

「はー、何かもう怒んのもアホらしなったわ。」

と、ため息と共に下に俯いた。そんな蓮司の姿を見た春樹は、不思議そうに首を傾げる。

「で、蓮司、さつきのは何の用だ。」

と、拗ねて夜御飯を食べている蓮司に聞くと

「え？ ああ、さつき未来ちゃんから、連絡入つてな、明日の朝のH
R無くなつて、全校集会になつたらしいで。」

と、蓮司が、左手で丼を持ちながら、春樹の質問に答える。

「何でだ？」

と、春樹が蓮司に聞き返すと

「いや、俺が知つとる訳、無いやん。」

と、蓮司間髪入れずに答えたので

「まあ、そりやそりや。蓮司が知つてる訳無いか。」

と、春樹は納得し、自分の席の前にあった、料理の皿を片付けて行く。前の席に座つて食べていた、蓮司は、今春樹が言つた言葉を考え

「うん？ 待つて春樹お前、今俺の事馬鹿にしてへんか？」

と、蓮司は立ち上がり、自分が食べた料理の皿を洗つている春樹に聞く

「イヤ、別に。」

と、春樹は言つと

「じゃあ、俺先、部屋帰るから。」

と、言つと自分の荷物を持ち春樹は自室へと戻つて行つた。その姿を見た蓮司は

「あ、おい、逃げんな春樹！！！」

と、叫ぶ声が部屋の入り口まで聞こえたが、春樹は無視し、部屋に入り鍵をかけ眠りに就いた。

朝起き、朝を食べていると蓮司に捕まり寮から学校までの距離を、永遠文句を言われたが、春樹は殆ど聞いておらず学校に着いたとたん

「全校集会つて何処でやるんだ？」

と、文句を言つていた蓮司に聞くと

「え？ あ、あー多分第一アリーナちゃうか。全生徒入る所やうたら、あつこしか無いしな。」

と、言い蓮司は第一アリーナの方へ向かつて歩き出す。その後ろを春樹と、今まで全く喋つていなかつた、ロイの三人で、第一アリー

ナに向かう。少し歩くと後ろの方から声が聞こえ

「三人共一待つてよ。」

と、呼ばれ春樹、蓮司、ロイが振り返るとそこには、ポニー・テールの少女長谷川美羽と、金髪巻き髪のお嬢様、レイラハーゲンボルトの二人が、春樹達の所に駆け寄つて来て

「みんなおはよー」

「皆様おはようございます。」

と、声をかけた一人は何故か嬉しそうな表情であった。その二人の嬉しそうな表情を見た蓮司は

「うん? 何や一人共、えらいご機嫌やん。何かええ事あつたんか?」

と、長谷川美羽とレイラに蓮司は聞くが

「別に何でもないよ。ねえレイラ。」

と、長谷川美羽がレイラに言うと

「ええ、そうですわ。何でもありませんわ。」

と、一人に言われたが蓮司は首を傾げて、そして春樹、ロイに

「今のはどう思つ?」

と、聞くが一人とも回答は、

「さあ」

と、言う答えが返つてきたので、蓮司が一人立ち止まり悩んでいる

と、

「ちょっと蓮司早く来ないと本当に遅刻するよ。」

と、言う声に我に帰ると、春樹、長谷川美羽、レイラ、ロイ、は蓮司を置いて先に進んでいた。するとそれに気が付いた蓮司はこちらへ走つてくる

「はあはあ、ホンマ、お前ら、俺一人置いて先行くなよ。ホンマ冷たい奴らやで。」

と、息を切らしながら追いついた蓮司は熱弁する。

「蓮司。熱苦しいよ。押さえて、押さえて。」

と、笑いを堪えながらロイが言うと

「ロイ！……お前顔が笑うとるわ。やっぱりわざと置いて行つたな。」

と、蓮司が言うと今まで笑う事を我慢していた、長谷川美羽とレイラも笑い出し春樹も苦笑していた。

「お前ら全員笑いよつて、後で覚えとけよ。」

と、朝から五人で笑いながらアリーナへと向かつた。

第一アリーナに着き分厚い扉を開けるとそこは物凄く広い体育館でそこにはこの学校の生徒の殆ど集まり全校集会までの時間をそれぞれの友人同士で集まり談笑を行つっていたその姿を見た春樹が

「こ」の学校、こんなに生徒がいたのか。」

と、春樹が言うと隣に立つていた長谷川美羽が

「そうだよ。何たつて魔法学校だからね。世界に4校しか無いから集まつてくる生徒の数も多いんだよ。でもここにいる殆どが一年生だよ。」

と、長谷川美羽に言われ春樹が回りを見渡すと殆どの生徒が自分とそう歳も変わらない生徒ばかりであつた。

「理由は私達一年生が入学したばっかりだから人数が多いけど二年生、三年生に上がるほど人数は減つていくし一年生と三年生じゃ半分以上人数が違うよ。」

と、長谷川美羽が春樹に言つと、春樹は納得し自分達の場所へと、移動する。

一年生の場所は一番前で、春樹達は自分達のクラスが居る場所に行くと、その列に混ざり全校集会が始まるのを待つていると、到着して5分程で、全校集会が始まつた。最初は、学年主任の壬生が挨拶をする。その内容は、どうでもいい内容で、春樹は猛烈な眠気に襲われる。春樹がフツと壇上の上を見ると、6人の生徒が席に座つてる事に気が付いた。気になつた春樹が、横に立つてい

たレイラに

「レイラ、前の席に座っている白い制服の連中誰だ？」

と、春樹が小さな声でレイラに聞くと

因みに春樹が今着ている制服は黒を基調とした制服である。

「前に座っている生徒は、生徒会の方々ですね。」

と、レイラも小さな声で答える。春樹はもう一度壇上の席に座る生徒を見る。

（生徒会か……）

と、壇上を見ていると学年主任の壬生の長い話しが終わつたらしく、全生徒が長いんだよ、といつ空氣を出していたが、次に出て来た老婆によつて、その空氣が壊される。その人物は、

魔法高校校長夏目咲乃、
なつあわせの

四季の一族夏目家先代当主夏目咲乃

大魔導師夏目咲乃、

そして極東の魔女夏目咲乃

夏目咲乃が現れた瞬間アリーナの空気が変わり生徒も教員にも緊張が走る。夏目咲乃是壇上の真ん中に立つと口を開く。その内容は、学年主任の壬生が、話した内容とたいして変わらないが、生徒、教員はその話しに耳を傾けるが、このアリーナの中で一人だけ話しき聞かず、極東の魔女を睨みつける様に、見ている生徒がいる。

（…………あれが極東の魔女夏目咲乃か……世界を動かす20人の一人……俺達の人生を変えた魔女……）

と、春樹が睨んでいると

（春樹、駄目だよ。今はまだ動く時じゃない。）

すると、春樹は小さな声で

「わかってる。秋人」

（わかつてるなら殺氣消してよ。他の連中にも気づかれるから。）

（・・・ああ

と、言いながらも春樹は夏目咲乃から視線を外さない。

（だから、駄目だって夏陽も何か言つてよ。）

(春樹、いい加減にしろ)

「夏陽か、だからわかっている。」

夏目咲乃是、話しを進めていたが、自分に突き刺さる様な視線に気が付き、視線が送られてくる方に視線を移すと、その瞬間突き刺す様な視線は消えた。

(今のは殺氣ですか。さて、さて、どちらの生徒でしょうか。) と、夏目咲乃是話をしながら殺氣を放っていた生徒を探すが見つからなかつた。

(上手いですね。先程あれだけの殺氣を放っていたのに、今はその痕跡すら残つていらない。一体何者でしょうか・・・) と、考えながら一ついい案が浮かぶ

「月末に行う春華祭に、一年生も参加してもらいます。」

と、夏目咲乃是が言うと動搖とざわめきが走る春樹はそれを聞くと隣にいたレイラに

「レイラ春華祭つて何だ?」

と、レイラに聞くと

「えっと、確か一年に一回春のこの次期に行われる一年生、三年生で行う魔術戦ですわ。」

と、レイラはおでこに右手の人差し指を置きながら思い出すかの様に言う。

すると夏目咲乃が

「今年の春華祭で優勝した生徒は私が短期間ですが直接魔術指導をします。」

と、夏目咲乃是が言うとアリーナがざわめくが、夏目咲乃是話しを続ける。

「参加出来る生徒の人数ですが三年生は七人、二年生は十人、一年生は三人とします。詳しく話しさは担任の先生に聞いて下さい。」

と、言うと夏目咲乃是壇上から下がり進行役の教員に後を任せると夏目咲乃是アリーナから出て行つた。

「じゃあ、今日の全校集会は終了だ。」

と、学年主任の壬生が言つとアリーナに居た生徒はアリーナから出てそれぞれの教室へと戻る。春樹達も教室へと戻る為に校内を歩いていた。

「なんや、凄い話になつてきよつたで。」

と、蓮司は歩きながら言つと

「そうですね。春華祭で優勝したら、校長先生からの、直接指導ですものね。」

と、レイラが答えると隣を歩いていた長谷川美羽が

「でも、指導してもらひには、優勝だもんね壁高すぎだよ。」

と、長谷川美羽は肩を落とす。少し後ろを歩いていた春樹は（だが、これはチャンスだ。夏目に近付く事は要因じゃない。）だか直接指導と言つことなら、話しさ別だ。必ず優勝して、あの時の真相を聞き出す。）

と、春樹は不気味な笑顔を浮かべた。

魔力検査と模擬戦6（後書き）

話がやつと前に進み出しました。

春樹達が教室に戻ると話題は春華祭の事で持ち切りでクラス中の生徒が何組かに別れて議論を行っていた。

そして長谷川美羽、レイラ、蓮司、ロイの四人も今月末に行われる春華祭の事について討論を始めだした。

「一年生代表三人で校長先生ゆうとつたけど一体誰が選ばれるんやろ。」

と、蓮司が一番疑問に思っていた事を言つと蓮司の隣の席に座る長谷川美羽が授業の準備を行ながり

「まあ、二枠は決まってるよね。」

と、長谷川美羽が言つと、春樹の前に座るロイがボールペンを右手でクルクル回しながら

「確かにね、今年の一年には天才が一人もいるからね。」

と、ロイが言うと今まで黙つていた春樹が

「・・・・その、一人で誰だ。」

と、春樹が言つと、今までボールペンをクルクル回していたロイがその手を止めて

「隣のクラスの朱・鈴と僕達のクラスの冬野雪音だね。」

と、ロイが答える

「その朱・鈴って言つのは誰だ？」

春樹がロイに聞くと

「僕も良くは知らないんだけど、隣のクラスの子達は朱・鈴は天才だつて。何か朱家つていう所の子らしいよ。」

と、ロイが答える

「なるほどな、朱家の者までいるとは。」

春樹がそう言つと長谷川美羽が

「春樹君、朱家って何？」

と、聞いてくるので

「朱家は中国では最高位になる四神の一族だ。まあ日本で言つ所の四季の一族だな。」

と、春樹が答えると

「春樹君つてなにげに物知りだよね。」

と、美羽が言つてくるので

「まあここに来る前に少し勉強したからな。」

と、答えた

「春樹君、四神つて言つのはまさかあの四神なの？」

と、また美羽が聞いてくるので、

「ああそうだ。四神は朱雀、青龍、玄武、白虎の事を指している。」

と、説明すると美羽、蓮司、ロイは納得した。だがその中でレイ

ラは一人黙つていた。

「レイラは朱家の事何か知つてるか？」

と、春樹がレイラに聞くと

「ええ。わたくし鈴とは幼い頃からの、知り合いなんですの。」

と、レイラが言つと

「えー、そなうなんだ初耳だよそんな事。　レイラやつぱり朱鈴つて、
強いの？」

美羽が、レイラに聞くと

「ええ。強いですわ。昔から憎たらし位に・・・まあ、それでも、
このわたくしの方が、強いですけどね。」

とレイラが言つが、いつもよつた、自信満々のレイラはそこには
いなく、少し弱々しかつた。

「はあー、春華祭への壁は、高いな。」

と、美羽がぽつりと呟いた。

(春華祭へ参加するには、三枠に入るしかないが、入れたとしても
問題はその先、生徒会とかいう連中もいるしな、俺も準備だけは、

しどぐべきか。）

と、春樹が考えていると、教室の前の扉が開き、担任の一一条未来が入ってきた。

一一条が教壇に立つと

「じゃあHR始めるね。さつきの全校集会で、校長先生から聞いたと思つけど、今月末に行われる春華祭に、一年生のみんなも、参加する事になったから、今日の授業は第三アリーナで、クラスの代表者三人を決めるね。詳しく話しさまた向こうで、するからみんな魔装具と、魔法結晶石を持つて、第三アリーナに来てね。」

と、一一条が説明すると一一条は、教室から出て行つたので、春樹達も教室を出て、第三アリーナへと向かつた。

春樹、美羽、レイラ、蓮司、ロイは第三アリーナに向かう途中、美羽が、

「はあー、春華祭か、私絶対出場とか無理だよ。」

と、美羽が肩を落とす

「確かに僕も絶対出場無理だよ。」

と、ロイも肩を落とす

「お前等な何をやるまえから、ゆうとんねん。」

蓮司が肩を落としている、一人に言うと

「だつて蓮司考えてみてよ、僕達のクラスには、冬野さんがいるんだよ。」

と、ロイが言うと

「何をゆうとんねんロイ、レイラ入れてもまだ、残りの一枠がまだ空いとるやんけ。」

と、言うが、ロイと美羽は、春樹の方を見て、ため息をつく

「春樹君がいるじやん。」

「春樹がいるよ。」

と、二人が声を揃えて言つたが、蓮司は話しを全く聞いておらず、

「よつしゃーーー！俺は絶対、優勝するぞ。」

蓮司の一人やる気のみちあふれた、姿を見て、美羽とロイはまた、深いため息をついた。

アリーナにつき一一条を待つ事5分、担任の一一条が現れ

「じゃあみんな、クラス代表の話しをするね。まず最初に言つとくね、春華祭には一年生、三年生も出て来るから、魔法結晶石の展開が出来ない子は、選べないの。だから、その子達は、一番最初に候補から、外さしてもらうね。」

と、言つて一條。この瞬間クラスの殆どの生徒が、クラス代表の候補から外れた。

「今このクラスで、魔法結晶石を展開出来るのは、三人だから今は、この三人で行くね。」

と、一條が言つと、選ばれ無かつたから生徒から、かなりのブーリングが上がったが、一條は話しを進める。

「今回選ばれ無かつたみんなにも、まだまだチャンスはあるから、春華祭は、来年も、再来年もあるから、上の学年に上がれば、出場枠も増えるから。」

と、説明すると全員渋々納得したようだったので、一條は話しを続ける。

「じゃあ、クラス代表の発表するね。一人目・・・・冬野雪音。」

と、言つと生徒の視線は、冬野雪音に向けられる。

「・・・はい。」

と、冬野雪音は小さく返事をする。

「じゃあ一人目・・・・レイラ・ハーゲンボルト。」

一一条に呼ばれたレイラは、

「わたくし、絶対優勝してみますわ。」

レイラは自信満々でそう言つ。

「じゃあ三人目…………志木野春樹。」

一一条に呼ばれた春樹は

（よし！…）これでの魔女に近づける。）

と、考えると少し笑顔になる

「はい。」

と春樹は小さく返事をした。

「じゃあ今回の、クラス代表はこの三人に決まりね。じゃあクラス代表も決まつたし、通常授業しようか。」

と、言い今日の、授業の説明をしようとした瞬間、

「先生、学年代表つていつ決めるんですか？」

と、美羽が一一条に尋ねると

「うーん春華祭まであと一週間だから、三人には悪いけど、明日からになるとと思つ。」

と、一一条が言つと

「それつて私達つて、観戦出来るんですか」

と、美羽に言われた、一一条は少し考え

「見れない事も無いと思つけど、全部は無理だね。 さつきも言った通、り今回の春華祭に一年生参加つてのが、実は今日決まつたんだよね。だから予定も組まれて無かつたから、色々準備もしないといけないから。」

一一条がため息をつきながら言つと

「あの、一一条先生私、クラス代表の実力を一度、見てみたいんですけど・・・・・」

と、美羽が言うと・他の生徒も

「私も見たいです。」

「確かに、今の俺達どの位の差があるか、気になるし。」

と、言う声が上がり、一一条は少し考え

(まあ、他人が戦つてゐる所を見るのも、勉強になるか……)

「一条は春樹、冬野雪音、レイラの方をちらつと見ると

「三人はどうかな?」

と、言われた春樹達は

「別にいいですよ。」

「私も大丈夫です。」

「わたくしも大丈夫ですわ。」

と、三人が答えるので

「じゃあ三人共悪いんだけど、前に出て来てもらつて、魔術模擬戦してもらうね。」

と、一条が言つ。

春樹達は模擬戦を行う為アリーナの真ん中に移動する。春樹、冬野雪音、レイラそして担任の一条。一条は今回数合わせの為参加することになり、厳選なじやんけんの結果、春樹の対戦相手は担任の一条になつた。

春樹と一条はアリーナの真ん中に立つと、

「先生、ルールはどうするんですか?」

と、春樹が尋ねると一条は、準備運動をしながら

「うーん……じゃあ私達の模擬戦、体術戦にしない? 魔術使うと……色々危険そうだし。じゃあ一発入れた方が勝ちつて事で。

」

と、一条が提案してきたので

「まあ、俺は全然いいですよ。」

と、答えると一条はニコッと、笑顔になり

「じゃあ、見せてもらいますか。アレックス先生を倒した体術。あつ先に言つとくけど、私、アレックス先生より強いよ。」

と、言いながら二条は構えをとる。

(さてと、Bランクの魔術師の、実力、見せてもらひつか。)

と、考えながら、春樹も構えをとる。

春樹が戦闘態勢に入つた事を確認した二条が

「じゃあ、春樹行くね。」

と、言うと二条はアリーナの床を蹴り、春樹との距離を縮め、右足蹴りで、春樹の顔面を狙いに行く、春樹はその蹴りを、かわし反撃に入ろうとするが、二条はそれを許さず。猛攻を続ける。春樹は二条から少し距離をとり

(最初の一撃、いきなり顔面狙いか。流石に、入つていたらちよつと危なかつた。)

と、考えていたら、二条は再び春樹との距離を縮め、足技主体に攻めたてる。

(動きもかなり早い。確かにあいつとは比べ様の無い位強いな。だが、急所にさえ入らなければ、攻撃自体は軽いな。)

と、考えながら二条の足技をかわしていく。

(まさか、最初の一発がかわされるとは。結構決めに行つてた分、ちょっとムカつくかも。でも春樹のこの動き、一体何者なの。)

と、二条が考え、一瞬動きを止める。その隙を見逃さず、次は春樹が攻めに入るが、二条も春樹の攻撃をかわしながら、反撃を行うが一発も入らない

(強い。こっちの攻撃が、全部読まれてる。くつそー腹立つ位避けるの上手いし。でも、何か楽しくなってきた。)

と、二条がさらに攻撃のギアを、上げて行く。

(ちつ、さつきより蹴りのキレが良くなりやがった。これ以上やつてもキリが無いな、まあ、一発、こっちから仕掛けてみるか。)

春樹が考えを纏めると、行動に移す。二条は春樹の首下を狙い、右足を振り抜く。春樹は二条の蹴りを右腕で受け止める。体重をかけていた、二条の身体は少し揺れ、体勢を崩す。春樹はその隙を見逃さず、二条の後ろに回りこみ、手刀を入れようとするが、体勢を立

て直した二条に、止められてしまい、再び距離をとられる。

(今は、結構狙いにいつたんだが、あれも避けるか……)

と、春樹が次の手を考える。

(痛つたー。今のは効いたよ。重い攻撃、右腕が少し痺れる。このまま長引かしても、決着つかないし……次で決める。) と、二条は再びかまえる。

そんな二条の姿を見た春樹は

(・・・次の一手で決めに来る気が。)

春樹も構え直す。二人の動きが止まりアリーナの中が沈黙に包まる。他のクラスメイトも固唾を飲んで、その勝負の行方を見守る。まず最初にその沈黙を破ったのは二条だつた。二条は全力でアリーナの床を蹴り、春樹に襲い掛かる春樹もまけじとアリーナの床を蹴るが、一瞬春樹の方が反応が遅れた為トップスピードには乗れない、その分二条は、春樹より早く出た分既にトップスピードに乗つている。そして二人の距離が二メートル程まで近づくと二条は身体を捻り勢いをつけ右足を振り抜く、それに対しても春樹も身体を捻り勢いをつけ、右足を振り抜く。

春樹の右蹴りは僅かに剝れ空を切る。

それに対しても二条の右蹴りは 僅かに春樹の頬を掠る。

「春樹今掠つたよね？」

と、二条が右脚を上げたまま春樹に確認する。

「・・・少し掠つた。」

と、春樹も右脚を上げたまま答える

「私の勝ちだよね？一応当たってる訳だし。」

二条が自身の勝利を固める為春樹に確認する。すると、春樹は一つため息をつくと

「まあ、そうですね。一応一撃もらつたら負けっていうルールですしね。」

と、言うと春樹は上げていた右脚を下げる。すると自分の勝利が決まった二条はすっと右脚を下げ

「・・・・・よし！－！私の勝ち！－！」

一糸は子供の様に喜んでいるそんな姿を見た春樹は少しだけ悔しそうな表情を浮かべた。

一一条との模擬戦を終えた春樹は、アリーナの壁に身体預け冬野雪音とレイラによる魔術を使った模擬戦を見ていた。冬野雪音とレイラの模擬戦は当初は冬野雪音の圧勝で終わると考えられていたが、先日の春樹との訓練によりレイラの魔術師としての力がかなり上がりおり、冬野雪音と中々にいい勝負を繰り広げていた。

「どうしたんですの。四季の一族の冬野家の時期後継者の実力はこの程度ですの。」

レイラは魔法結晶石で展開したレイピアで攻めたてる。その顔には自身の優勢もあり余裕の表情を浮かべる。それに対し冬野雪音は押されではいるが表情は揺るがず、いつもの無表情のままで、レイラのレイピアから放たれる突きをかわしていく。

「避けるばかりじゃ、このわたくし、レイラハーゲンボルトには勝てませんわよ。」

レイラが攻撃し、冬野雪音が攻撃をかわす。この状況が先程から続いているおり春樹は正直言つと、少し飽きていた。春樹がそんな表情を浮かべていると

「春樹、あんた何サボってんの。」

と、声をかけられた春樹がその声の方を見る

「はあ、サボつてませんよ、先生。」

春樹に声をかけてきたのは担任の一一条でそして一ノ一コしながら

「春樹、あんた、まさか私に負けて拗ねてるの?」

と、憎たらし位の笑顔を作り春樹に言つと

「はあ、そんな事あるわけ無いじゃないですか。」

と、春樹が深くため息をつき呆れた顔でそう言つと

「まあまあ、いいじゃない私相手に良く頑張った方だよ。」

「一条はハツハツハと笑いながら言つ。

(・・・・)いつ

春樹がジト目でみるが一条はそんな事を待つたく氣にせず笑つていたが急に笑うのを止め

「でさ・・・・春樹あなたは何者なの？」

「一条は今までの笑い顔がまるで嘘の様な真剣に春樹に聞く
「・・・・何故そんな事を聞くんですか。」

春樹は表情を変えず一条に聞き返す

「あなたは闘えたBランクの私と互角に、一介の学生が普通は無理な話し。」

二条が一生徒に向け無い様な表情を浮かべるそれはまるで敵と相対している様な表情で

「もう、一度聞くわ・・・志木野春樹、あなたは何者。」

と言つ「一条の質問に春樹は一瞬黙るが

「・・・・・ただの一介の生徒ですよ。体術の方は昔習つたんですよ。知り合いから。」

と、春樹が答えると一条は春樹の方を見つめ少し黙り込む。

「・・・・・・・そつか。ゴメン春樹変な事聞いた。」

と、一条が言うといつもの表情に戻り、冬野雪音とレイラが模擬戦を行つてゐる方へと移動した。

(・・・・完全に怪しんでるか・・・そろそろ潮時か・・・)

と、春樹が考へてゐると

(やり過ぎたね。春樹。)

「・・・夏陽。秋人。悪かつた。」

(まあ今さら悔やんでも一緒だろ。)

(そつだよ春樹、切り替えて行こうよ)

(夏陽、秋人ありがとう。)

と、言うと春樹は模擬戦を行つてゐる冬野雪音とレイラの方に視線を戻す、一人の勝負はまだ着いておらずレイラ優勢のまま勝負が続

いていた。

「あなた！！！いつまで逃げおつもりなのです！」

と、優勢のレイラの表情はいくら攻撃しても反撃の一つ見せない冬野雪音に苛立ちを見せていた。

「何故反撃の一つもしないのです。」

レイラのいらだちがつのつしていく。対して冬野雪音は表情一つ変えずレイラの攻撃を避ける。そして今まで黙っていた冬野雪音が口を開く。

「あなたは・・・」これまで十二回魔術を使いました。そろそろ魔法結晶石も限界が近い。」

と、冬野雪音に言われレイラは

「そんなの関係ありませんわ。」しきりの限界が来る前にあなたを倒しますわ」

と、レイラが言つと手に持つていたレイピアを握り直し、冬野雪音へと攻撃を行う。その攻撃を冬野雪音は避けているが何発かは身体に掠つて行く。

「どうしましたの。先程よりも動きが干満になつてますわよ。それにいくら魔術結界が張られている制服でも当たる痛いでわすまないですわよ。」

この学校の制服は防刃、防弾、防魔、に優れる。刃は通さず、銃弾も通さず、魔術からも身を守る。だがいくら防刃、防弾、といえも斬られたり銃で撃たれると、当たり所が悪ければ骨折位はする。そして対魔も属性攻撃の雷等の内部破壊等の攻撃からは身を守るが魔力 자체を消しているだけなので攻撃 자체の威力は消すことは出来ない。なので当たれば戦闘不能に陥る事もある。

冬野雪音はレイピアで攻撃された部分に手を当て確認するがそこには怪我は無いが痛みは残っている。冬野雪音は顔が痛みで少し、しかめ

「・・・・・」

そして、冬野雪音は自身の魔装具の銃を取り出すとレイラに向ける。

「やつと、やる気になりましたの。」

と、レイラに言われた冬野雪音は

「はこ・・・でも勝負はこれで終了です。」

と、言つと冬野雪音は引き金を引く。放たれた一発の銃弾はレイラの方には飛ばず、レイラの右手に持たれたレイピアに直撃する

「きやああ

と、レイラが叫ぶ。そしてレイラの右手に握られていたレイピアは銃弾が直撃した衝撃で後方へと滑る様に転がつて行く。それを見た冬野雪音はレイラとの距離を詰めレイラに魔装具の銃を突き付け

「・・・まだ。続ける?」

と冬野雪音が冷たい表情を浮かべてレイラに聞く

「わ、わたくしの負けですわ。」

最初はまだ続けようとしていたらレイラも冬野雪音の冷たい表情に負けたらしく負けを認めた。その戦いを見ていた春樹は

(へえ、思つっていたよりいい腕だな。)

と、春樹はフツとレイラが使つていたレイピアの方を見る
(しかも、反撃防止の為に武器を凍らせて使用出来ない様にしている。)

と、春樹が考えていると

「冬野さん凄いね。」

「ほんと、ほんと今度私の練習に付き合つてよ

等とクラスの女子が冬野雪音の下に集まるが相変わらず冬野雪音は無口で話しかけた女子達が氣まずそうにしていたがそこには「の庄の二条が現れ

「みんな、もうお昼だから午前中の授業はこれくらいにして午後からは教室戻つて理論授業だから教室集合で。」

と、二条は言つとアリーナを後にした。

午後からの授業の理論で春樹の得意分野では無かつたので春樹は春の暖かさもあり昼寝を行つていた。何度も二条にも起こされたが睡魔には勝てず、授業が終わるまだ寝ていた。そして授業が終わり春樹が帰宅するため荷物を纏めていたら担任の二条に呼ばれ

「あつ春樹明日からの事で説明とかあるからちょっと残つてね。」

春樹は少し寝ぼけた顔で

「明日じゃ駄目なんですか？」

と、春樹が言つと二条は呆れた顔を浮かべて

「あんたね、明日の事伝えるのに何で明日言つの、それじゃ意味無いじゃん。」

と、二条は呆れながら言い

「春華祭の一年代表決めるの明日からするからその件で伝える事があるの。」

と、言われた春樹は

「今からじゃ駄目何ですか？」

と、春樹が言つと

「あんただけに言つても意味無いの。雪音とレイラにも話すからここで待つて！ わかった！！」

二条はそう言つと教室から出て行つた。その姿を見送つた春樹は（なんだ？ 何怒つてるんだ。）

と、春樹は考えたが答えは出ない。仕方が無いから春樹は二条が教室に戻つて来るのを待つていた。放課後の教室には誰も残つておらず春樹と同じく残る様に言われた冬野雪音、レイラの姿も無く春樹は一人教室で待つていたら、教室の後ろの扉が開き冬野雪音が教室へと入つてきた。教室に入つてきた冬野雪音は教室を見渡すと

「志木野君、二条先生は？」

と、春樹に聞くが

「見ての通りだ。二条も来てないし、レイラも来てない。」

と、春樹が言つと冬野雪音は

「やつ」

と、一言だけ言つと春樹の横の自分の席に着く。そして会話が無くなる。そして二人は何の会話無く自席に着き担任の一一条を待つが一向に現れ無かつた。春樹がもう帰ろうかなと考えていたら、先程の魔術模擬戦で気になつていた事を思い出し

「さつき使ってた魔装具、学校からの支給品じゃ無かつたな。」

と、突然春樹に言われた冬野雪音は少し驚いた表情を浮かべ

「何故分かつたの？」

と、言うと春樹は前の方を向いたまま

「前に学校で支給される魔装具を見たことがある。発砲音も回転の回数も段違いだつた。あと、威力もな・・・学校で支給される程度の銃じやあそこまでレイピアも飛で行かないしな。」

と、春樹が言つと冬野雪音は自分の魔装具を取り出し

「うん。その通り。この魔装具雪白は冬野家の当主の証。この学校に入る前に父から譲つてもらつた。冬野の家宝。」

冬野雪音の出した魔装具は銃とは思えない程の美しさで、全体は白の塗装に覆われていた。

その魔装具雪白を見た春樹は

「綺麗な銃だな・・・・」

と、言い。そして小さな声で

「少なくとも人殺しの道具には見えない。」

と、言うが最後の言葉はどうやら聞こえなかつたらしく、冬野雪音は不思議そうな表情を浮かべるが、それ以上は何も聞いてこなかつた。最終的に担任の一一条が現れたのは教室で待つてと言われた1時間後で一條が教室に来る5分位前にレイラが教室に入ってきて蓮司の席に着いていた。

「ゴメン、ゴメン遅くなっちゃた。明日の事で会議してたからさー。」

と、一條は言つと春樹の前の席に座り、こちらの方を向くと

「何か、思ったより一年代表の試合に出れる生徒つて少ないらしい

んだよね。」

と、言うと春樹の後ろに座るレイラが
「一体何人が参加しますの？」

レイラは自分の前髪をいじりながら聞くと
「ええとこのクラスの三人と、二組の朱・鈴と一組の風間あとは一

組から一人位だったかな。」

と、二条が言うと朱鈴の名前を聞いたレイラは
「・・・鈴、絶対負けませんわ！」

と、レイラは一人闘志を燃やしていた。

「一応明日の放課後するんだけど思つてたより参加人数少ないから
多分明日で全部すると思うから覚悟しておいてね。じゃあ三人とも
何か質問とかある？無かつたらこれで解散だけど。」

と、二条が言うと冬野雪音が

「先生。魔装具オリジナルでも大丈夫ですか？」

と、言われた二条は冬野雪音の魔装具雪白を少し見て

「まあ大丈夫だよ。元々最初に渡した魔装具つて二年生、三年生つ
てもう使つてる子いないし。みんなオリジナルだしね。」

と、二条に言われた冬野雪音は

「わかりました。」

と、答える。その会話を聞いていた春樹、レイラも

（俺も、春華祭の前に準備だな。）

（わたくしも今日の模擬戦で壊された代わりに家から送つてもらい
ますわ）

ちなみにレイラの魔装具のレイピアは冬野雪音の氷の力によりバラ
バラにされてしまい、使い物にならなくなってしまった。

「じゃあもう質問無いみたいだから私行くね。」

と、言い二条は席から立つと教室から出て行こうとしたが途中で立
ち止まり

「三人共、明日頑張ってね。」

と、一言だけ言い残し教室から出て行った。

魔法力検査と模擬戦8（後書き）

投稿が遅くなりました。

午前の授業も午後の授業も通常科目の授業で普通の高校生が習う様な一般科目授業で春樹の不得意分野でもあつたので春樹は終日居眠りをしていた。

そして最後の授業のチャイムも鳴り全ての授業が終わり春樹が座りながら、身体を伸ばしボオーとしている、春樹の座っている席の前に美羽、蓮司、ロイがやって来る。そして蓮司、ロイはいつも通りの調子でくだらない話をしてくるが、美羽は少し春樹達の心配をしているらしく、表情はいつもより硬かつた。

「春樹君、相手は一年生だけだし、春樹君強いから、大丈夫だと思うけど怪我とかしないように気をつけてね。」

美羽が心配そうな表情をしながら春樹に言う

「うん？ああ。わかってる。心配しなくても大丈夫だ。」

と、春樹がニコッと美羽に微笑む。すると美羽は顔を真っ赤に染め

「う、う、うんそうだよね。春樹君頑張ってね。」

そんな美羽と春樹とのやり取りをジーツ横から見ていたレイラが
「・・・美羽・・・・・・・・一応わたくし達も代表戦に出るんですよ。」

と、レイラが腕を組みながら呆れながら言うと

「わ、わかってるよ。ええと、レイラと冬野さんも代表戦頑張つて
ね」

と、美羽が言うと、レイラは、席から立ち上がり

「何か、適当な感じがしますけど・・・・まいいですわ。
わたくし、レイラ・ハーゲンボルトの実力を見ていて下さいな。」
と、レイラ言うと左手を腰に当て右手の人差し指をビッシーとお決

まりのポーズを取る。そして冬野雪音は、まさか自分にも声をかけられるとは思っていなかつたらしく、少し驚いた表情を浮かべるが直ぐに、表情をいつものキリッとしたものに戻し

と、小さく答えた。

春樹達が教室で待っていると、担任の一条が教室に急いで入ってきた

「じゃあ雪音、レイラ、春樹の三人。第三アリーナで今日の代表戦やるから、準備して来といてね。」

「なんや、未来ちゃんえらい忙しかつたな。」「

うと うと うと うと うと うと うと うと うと うと

「まあ、今日の準備とか色々あるから仕方無いんじゃないかな。」
と、ロイが言いその姿を見ていた春樹が

一
・
・
・
・
・
・
行
く
か。
」

と、言い。春樹が立ち上がり、机に立てかけてある魔装具を取り右手で持つ。春樹の横の席の冬野雪音も立ち上がり、教室から一番最初に出ていく。そしてレイラも立ち上ると側に置いてあつたレイラを持つ。そんなレイラの姿を見た美羽が

と、美羽がレイラに聞くと

「そうなんですね。昨日学校が終わってから直ぐに、実家に連絡しまして送つてもらつたんですね。」

と、レイラが言つた

「…………え？ 一日でイギリスから荷物つて届くものなの？」

「ええ。実家のプライベートジオジットで、届けてもらつたんですわ。

と、レイラが「当たり前ですわ」と言つ表情を浮かべ言つたので

「さ、さすがイギリス貴族のお嬢様。スケールが違いますわよ。

美羽が驚きと、呆れた顔で言うと、レイラは不思議そうな表情を浮かべた。そんなレイラの姿を見た春樹が

「レイラ遅れたらまた二条にどやされるぞ。」

と、春樹が教室の扉に手をかけながら言うと

「あ、ちょっと待つて下さい春樹さん。」

と、言い。春樹の下に駆け寄る。そして

「皆さん行つてきますわ。」

と、レイラが美羽、蓮司、ロイに言うと

「うん。頑張つてねレイラ。は、春樹君も気をつけて。」

「おお、俺等の分も頑張つてくれよ。あとで応援行くかいに。」

「一人共頑張れ。」

と、美羽、蓮司、ロイの三人に言われた春樹とレイラは、教室を後にした。

アリーナに行く途中校内を歩いていると

「わたくし、もし鈴との戦いになつても勝てるでしょうか?」

と、いつも自身満々のレイラが、かなり弱気な発言をする。

「・・・さあな。俺は相手の実力を知らないからな。そればかりはわからないな。」

春樹が少し考えそう言つと

「そうですわよね。」

と、元気無く答えるレイラ。そんな姿を見た春樹が

「いつも強気なレイラにしては珍しいな。そんな弱気は。」

と、春樹に言われたレイラは

「・・・・・わたくし、昔から鈴に勝つた試しがないんですわ。」

理論の方では勝てるんですけど、身体を動かす事では全く勝てた試しが無いんですわ。」

レイラはため息混じりにそう言つ。春樹は少し黙り込み

「…………レイラ。戦う前からそんな調子だつたら、勝てる戦いも勝てない。」

と、春樹弱気なレイラにそう言い

「俺は、少なくとも戦う前は絶対にそんな事は考えないな」と、春樹が言うとレイラは少し考え込み

「あ、ありがとうございます。春樹さんにそう言われたら自信が湧いてきましたわ。」

レイラは満面の笑みでそう言ひと春樹の前を歩く

(春樹。優しいね。昔はそんなんじゃ無かつたのにね。)と、言う秋人に言われた春樹は

「黙れ秋人。」

と、春樹が言うと

「え？ 春樹さん今何かいました？」

春樹の小さな声に前を歩くレイラが、気付き聞いてくるが

「いや。何でもない。」

レイラは不思議に首を傾げながら

「そうだったらしいんですけど。」

と、レイラも「気のせいですか。」と言つ表情を浮かべながら、春樹とレイラはアリーナへと向かった。

アリーナに着き、扉を開くと他のクラス代表者の視線が春樹とレイラに向けられるが、春樹はそんな視線を全く気にせずアリーナに入る。一方レイラも先程とは違い、自信満々の表情を浮かべながら春樹の後ろを歩く。

「レイラ、朱・鈴で言う奴はどうだ。」

と、春樹はレイラに聞くと、レイラはキッロキッロと周りを見渡し「まだ来ていないみたいですね。まず鈴が来てたらもつと賑やかになってしまいますわ。あの子はとつてもつるたいのです。」

と、レイラが言つそんなレイラを見た春樹は（レイラでもかなり喋る方だろ・・・そのレイラが言つんだから・・・はあ想像もしたくないな。）

と、春樹がうんざりと言つ表情を浮かべる。そんな春樹を見たレイラが

「春樹さん。今何か失礼な事を考えていませんでした？」

と、レイラに図星を突かれた春樹は

「イヤ、そんな事は無い。」

と、少し顔を引き攣らせながら春樹が言つ。レイラとそんなやり取りをしてくると春樹が一つの視線に気が付き送られてくる視線の方を見るとそこには一人の男子生徒と目が合つ（あいつ・・・確かにあの時の・・・）

春樹の見た生徒は数日前アリーナで戦った風間俊敏がそこにいた。風間は春樹の方へと歩いてくると

「お前も代表戦でんのかよ。」

風間は春樹の前に立ちそつそつとそれに対して春樹は

「そうだ。」

春樹が一言そつそつ

「今日はお前をぶちのめしてやるから、覚えてね。」

そう、風間は言い春樹から離れて行く

「まあ何回やつても無駄だと思つがな。」

と、春樹は一言呟いた。春樹とレイラがアリーナの中を歩いていると

「あら、冬野さん。」と、レイラは言い冬野雪音の所へ行くと

「冬野さん。あなた、目的地は一緒なんですねに何故先行くんです」

の

と言ひ寄られた冬野雪音は少し驚いたが

「理由は無いです。」と、やつぱり答える。やつぱられたレイラは大きくため息をつき

「そんな態度でわ、いつまでたつてもお友達が出来ませんわよ」と、レイラに言われた冬野雪音は、レイラの方をじっと見て少しムスッとした表情を浮かべ

「わ、私友達なんて・・・・い、要りません。まず、あなたにそんな事を言われる筋合いがありません。」

冬野雪音はそうレイラに言つがレイラは一步も引かず

「関係ありますわ。わたくし達はクラスメイトですからね。」

と、言つ葉に冬野雪音は黙り込むそしてレイラは少し考え込み「・・・・・・そうですね。じゃああなたの友達一人目はわたくしがなつてあげますわ。」

その発言に、冬野雪音は驚きそして側にいた春樹も驚く。

「春樹さん。あなたもですわよ。」

と、急に言われた春樹は

「はあ？俺も

と、春樹が驚きながら言つと

「当たり前ですわ。」

と、言つとレイラは冬野雪音の方に振り返り

「いいですわね。わたくしは、あなたの事を雪音と呼びますのであなたはわたくしの事をレイラと呼んで下さい。」

と、レイラの気迫に押された冬野雪音は

「・・・・・わかった。・・・・レイラ。」

と、恥ずかしそうに言つ。そしてレイラは続けて春樹の方を向くと

「ほら、春樹さんもですわよ。」

レイラに言われ春樹はため息をつくと冬野雪音の方を見て

「・・・・まあ俺の事は適当に呼んでくれ。」

と、春樹が言つと冬野雪音は

「・・・・・うん。よろしく春樹。」

と小さな声で雪音は言つ。そしてそれを見ていたレイラはうんうん

と頷き

「じゃあ一人共今日は頑張りますわよ。

と、直つづりの命令に春樹と雷音は

「ああ。」

「・・・つん」

と二人は答えた。

春華祭そして来訪者1（後書き）

最近仕事の関係で投稿が遅くなっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4099z/>

魔法世界と高校生

2012年1月14日22時53分発行